

3. 矢加部町屋敷遺跡のまとめ

有明海沿岸道路に伴う矢加部町屋敷遺跡の発掘調査は、調査用地内のうち3,400㎡を、平成16年度から19年度まで断続的ではあるが4年間にわたって発掘調査し、その整理報告作業も5年におよんだ。報告書の刊行については平成18年度報告が4次調査の遺構のみになったため、IIIについては4次調査の遺物と5次調査の遺構のみとなり、IVでは5次調査の遺物から掲載するというずれが生じてしまった。本報告が最終年度であり、このような利用しにくい状態で刊行した反省も踏まえて、ここで調査成果を総括したい。

矢加部町屋敷遺跡は久留米柳川往還という街道沿いの藩境の町屋であることから、街道の側溝と藩境木埋設坑を発見することができた。遺物については柳川市域の近世遺跡としてまとめた資料が得られたことから、これまで筑後市や久留米市で発見されてきた土師質瓦については有明海沿岸という軟弱土壌に適応した特徴的な家屋に伴うものと推察できる資料が得られた。また、水田焼や蒲池焼、在地産焼塩壺などの筑後地域の近世土器や燻し瓦に新たな知見を見出すことができた。

出土遺物については、木製品の残りが良かったものの、量が多かったので残存率の高いものを優先的に掲載した。

遺構の変遷

本遺跡は微高地に展開する自然発生的な集落でなく、街道沿線に計画的に設置された集落であるため、通常は集落を形成しない軟弱土壌に展開している。出土遺物中の弥生土器や須恵器、中世陶磁器などは、いずれも混入品であり、最も古い時期のものは17世紀中葉段階である。戦国時代においても、柳川城から北に向かう道路は矢加部地区を迂回して蒲池地区に通っており、それまではこの地区は耕地としても使用されていない低湿地だったようである。

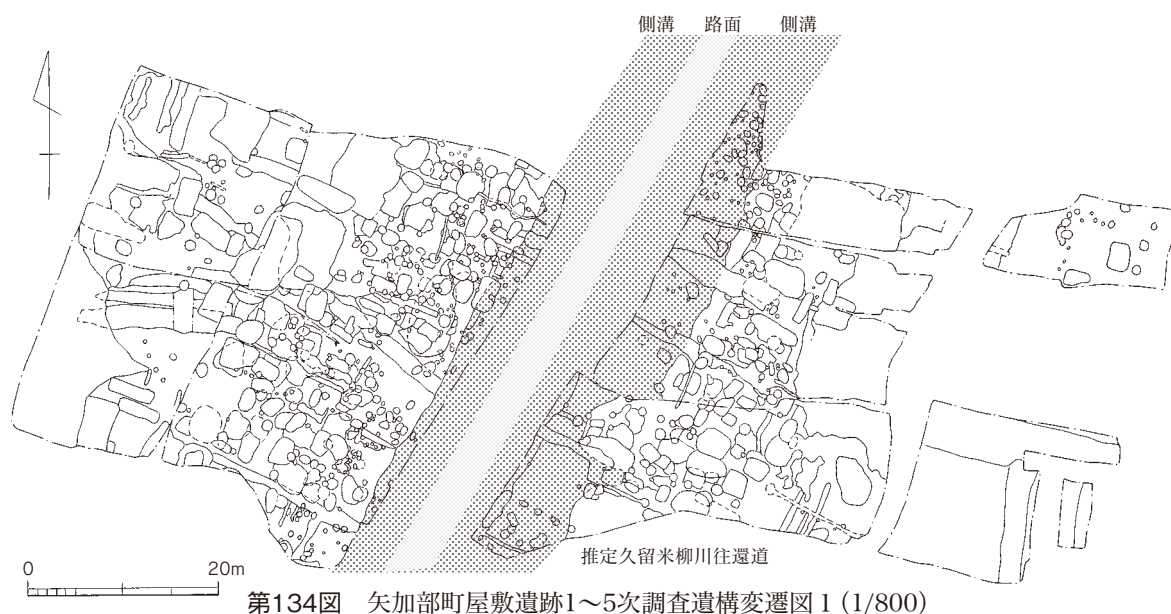
最初に遺跡が形成されたのは17世紀であろう。遺物自体は17世紀中葉から見られるものの、土坑など居住地の痕跡はなく、県道に沿って走る県道西側の4次調査西区の4号溝状遺構と県道東側側の4次調査東区10号溝状遺構・5次調査3号溝状遺構・1次調査の1号大溝だけが存在していた。県道の左右に併走する溝は、県道が久留米柳川往還に比定されていることから、この街道の側溝と考えられる。

県道の左右の調査区とも県道側に溝の壁が発見されておらず、溝の幅と道路の幅はわからない。西側溝側の検出範囲が少ないことから、現在の県道の東側車線側に道路があったと推定できる。

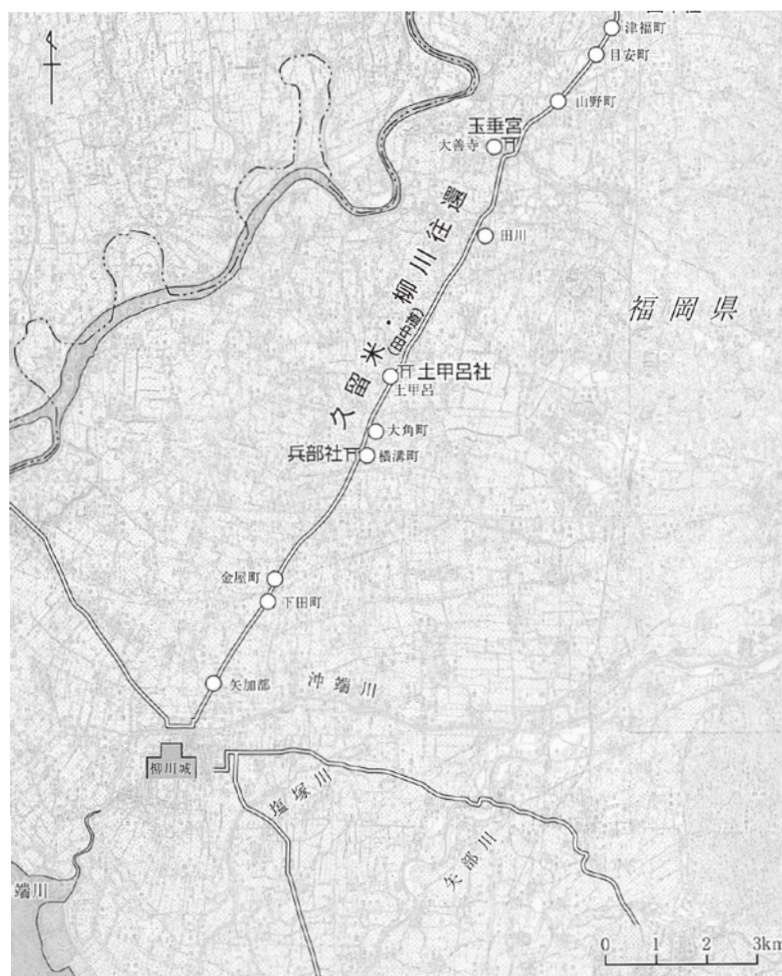
久留米柳川往還は久留米城下町から柳川城下町を繋ぐ街道で、田中吉政が慶長7(1602)年に整備したものである(第135図)。「台所入之掟」によるとによると「新道の両脇に溝を幅4尺(1.2m)に掘るように」とあるが、道路幅についての記載はない。『山門郡柳河村他地誌』(引用文献7)では山門郡外町から三潞郡矢加部までは幅二間と記している。これは柳川市三橋町橋本地区にこの久留米柳川往還が道幅約2mで両脇に4m幅ほどの側溝をもって現存しており、矢加部町屋敷遺跡の側溝規模と推定道路幅と合致する(写真1・2)。

17世紀中葉には側溝は埋め戻されて整地され、集落が形成されるようになる。これは田中家が断絶し、筑後国が久留米藩と柳川藩に分かれた時期にあたり、矢加部地区に国境が置かれることになる。側溝を埋めたのは関所を置くためには道幅が狭すぎたためであろう。

17世紀中葉の陶器摺鉢片が出土した藩境木の埋設坑はこの時期に置かれたものだろう。当時は藩境木周辺から離れて家屋が建てられていたと推定している。



第134図 矢加部町屋敷遺跡1～5次調査遺構変遷図1 (1/800)



柳川故書館『秀吉を支えた武将 田中吉政』より

第135図 久留米柳川往還路線と現存する往還道跡



写真1 久留米市柳川往還道跡1(北東から)

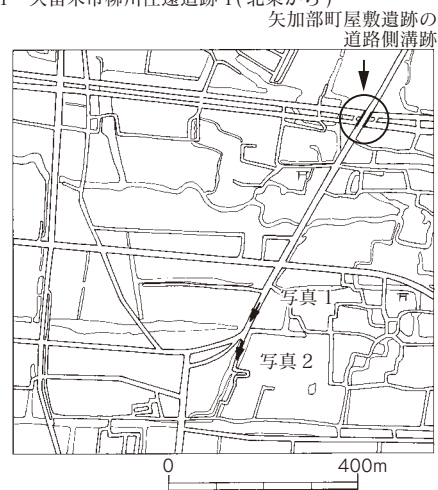
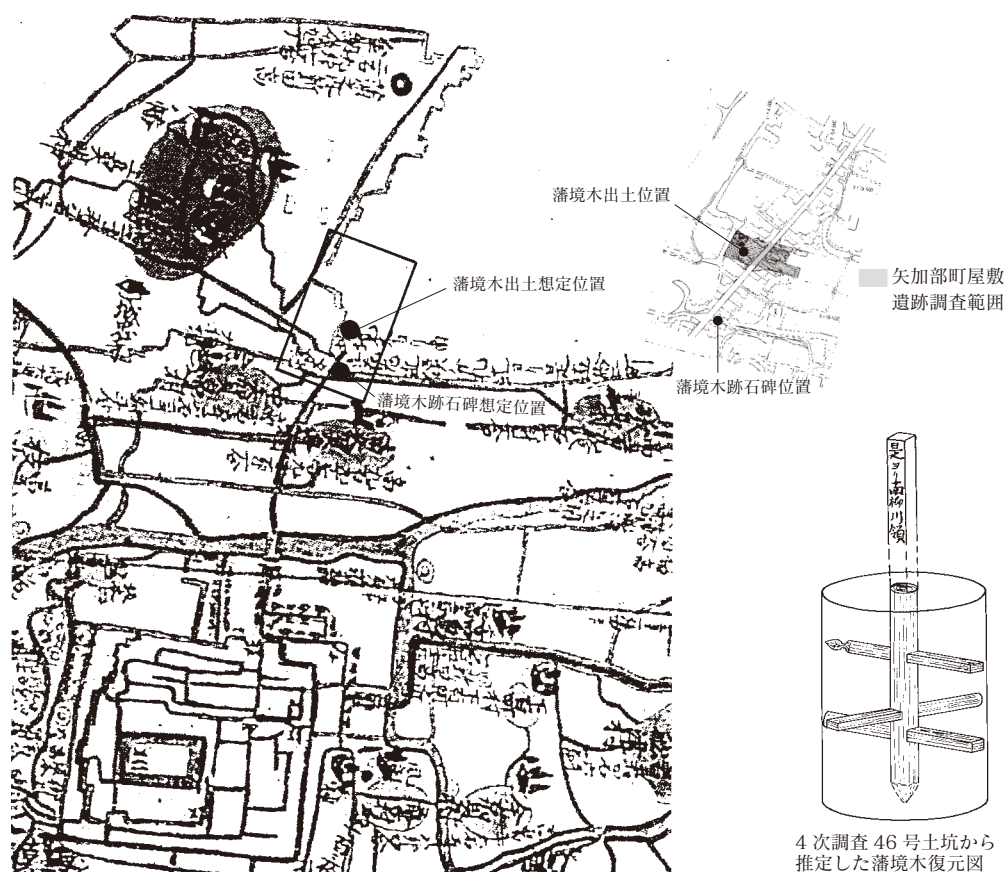


写真2 久留米柳川往還道跡2(北東から)

現在の藩境木跡の石碑は100mほど南の県道脇に建てられているが、この藩境木が移転したのか、別の藩境木がその場所に立っていた双方の可能性がある。「御領内絵図」(注3)には藩境木の存在が記されているが、道路との位置関係は記されていない。少なくとも調査区内の藩境木は次の18世紀前葉段階には失われている。18世紀初頭から遺構が急速に増え、集落が発展したことがわかる。18世紀から多く見られるのは、方形で壁が直立する深さ50cm以上ある土坑で、朽柄と炭化物の層が互層を成しており、種子や木製品も多く出土する。この特徴的な土層は自然に堆積したものではなく、県道西側の4次調査区では方形の大型土坑にも見られ、規模の大小があっても同じ機能を有していたと考えるべきだろう。



第136図 矢加部町屋敷遺跡1～5次調査遺構変遷図2 (1/800)



『御領内絵図』部分抜粋

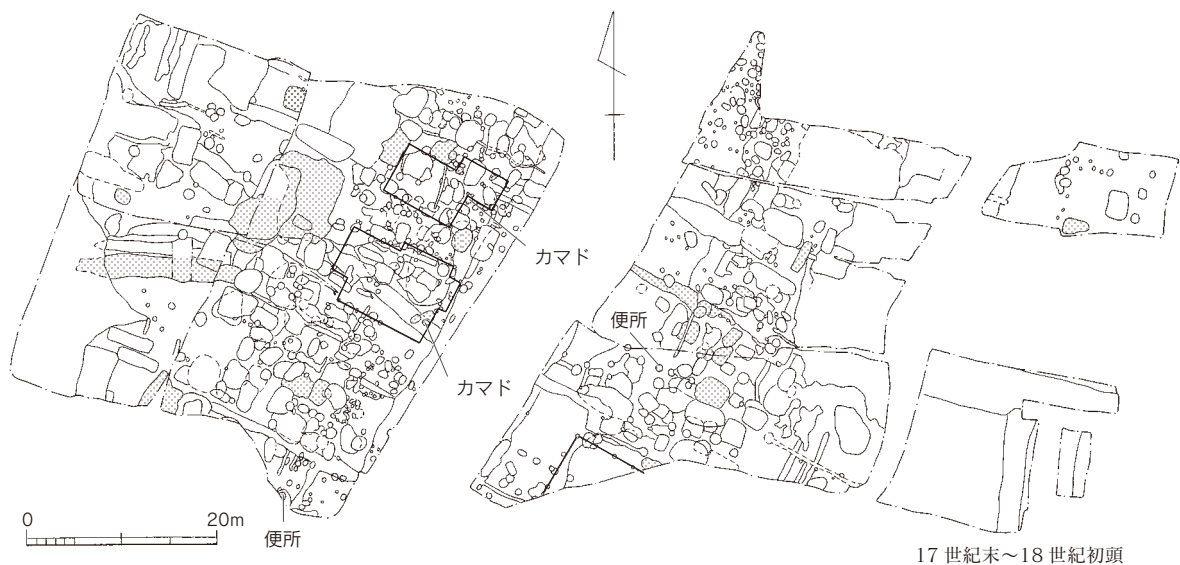
第137図 藩境木位置図と推定復元図

大型土坑は近世遺跡では地下室や大規模な災害の跡の片付け用の廃棄土坑であるなど施設として検出されることが多いが、本遺跡のように薄い瓦層は自然堆積とは考えにくく、廃棄土坑にしては遺物が少ない。また、4次調査4号大土坑には護岸施設もあり、単なる廃棄土坑ではないだろう(注4)。

最も近い民俗例として、堆肥小屋の記事があった。大川市向島地区の堆肥づくりの記事によると、土塀で壁を作り壁が崩れないように「ヨシ」で囲い、ヨシが取れないように縄で横木を結んだ堆肥小屋を作るらしく、本遺跡の土留遺構はこれではないだろうか(引用文献8)。そこに馬の敷き藁や刈り草、ワラくずを積み上げて堆肥を作ったとあるので、つまり、土留遺構としたものは土坑の壁ではなく、縁に作られた土壁を補強するものということになる。土留遺構は細い竹が挿し込まれて並んでいるとしたが、ヨシであったかもしれない。4次調査の64号土坑の土留が平面方形プランの2辺にしか設けられないのは作業しやすいように2辺は簡易的な土留が置かれたということだろう。堆肥は発酵させることで肥料になるが、粃殻が腐っていないのは発酵に失敗して堆肥にできずに廃棄したためだろう。小規模な土坑で作られる堆肥は小規模な畑用かもしれないが、大規模な堆肥小屋の存在は農家があったことを意味する。したがって、県道西側の調査区には農家があっただろう。出土した栽培植物は消費したものだけでなく、生産したものもあるのではないだろうか。

また、『福岡県蘭業誌』(引用文献9)に安政六(1859)年に蒲池村の近藤茂三郎という莫産商人がいたことが記されており(注5)、5次調査1号大土坑出土の大型の縫い針(47図9～11)は莫産用であったのではないだろうか。近代のものだが4次調査客土層出土の「莫産問屋」杯(49図12)が出土しているので、蘭業農家が近代になって莫産商を営むようになったのかもしれない。

県道東側でも堆肥を作ったと思われる土坑があるので、畑は作っていただろうが、他の業種を想定させる遺物が出土しているので、本業は別にあったのだろう。5次調査1号大土坑では布を送ったという内容の荷札木簡が出土しており、呉服店宛てのものと思われる。東区では1号大土坑があるために家屋の裏手の空間が狭く、農作業する場所がないので、ここには呉服店があったことが推察できる。1次調査2号大溝出土の朱墨用の硯(第123図2)もこの呉服店で使用されたものだろうか。地元の古老の聞き取りでは、与田商店という呉服店があったということである。



第138図 矢加部町屋敷遺跡1～5次調査遺構変遷図3 (1/800)

また、1次調査2号大溝から出土した飾り矢(第130図2)は上棟式で使うものであり、式後に棟梁が持ち帰るものらしいので、大工の棟梁の家が近隣にあった可能性がある(引用文献10)。

県道東側の南部では近代の鋳造遺構や鋳型が出土しており、幕末から明治の鉄滓を入れた土瓶が胞衣壺(第33図6)に見立てられて埋められていたことから、鋳掛屋が存在していたと思われる。本遺跡から出土する鋳造関連の遺物で最も古いものは4次調査84号土坑のるつぼの羽口であり、17世紀後葉から存在していただろう。明治36(1903)年の「蒲池村是」(文献11)によると金納・矢加部・東蒲池・西蒲池・立石・高島の6村を合わせて蒲池村とし、村内に鋳物繕師3名がいると記載されており、鍛冶職人の記載はなかったので、少なくとも明治後期には鋳造のみを行っていたようだ。

また、植物遺体の分析で、1次調査3号土坑で漆の実が絞られた後の状態で多く出土しており、4次調査5号大土坑出土の碗(『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』第37図3)の内面には漆らしいものが付着しているが、漆職人がいたにしては漆の付着した遺物が少なすぎるので、自家製の漆糊を作った痕跡だろう。実際に漆糊で継いだ蓋が出土している(『矢加部町屋敷遺跡Ⅰ』第51図11)。

これらの家屋は集落成立後、建て替えをしながら近代まで存続している。大正包含層が厚く堆



第139図 矢加部町屋敷遺跡1～5次調査遺構変遷図4 (1/800)

積んでいるのでこの時に大きく地上げされ、大溝も埋められて現在の土地区画に近い状態になったようである。

瓦について

本遺跡の燻瓦の出土数はわずかだが、製作地を記した刻印のつく軒平瓦・平瓦が出土したことで、柳川で生産された軒平瓦の瓦当文や製作地が明らかになった。

筑後地域では瓦の生産地として久留米市城島地方が有名だが、それ以外にも柳川市やみやま市でも近世の瓦生産の記録がある。本遺跡の資料と蓄積された筑後地域の近世軒平瓦資料を比較検討することで、本遺跡出土の軒平瓦の年代を推定するとともに、筑後地域の瓦の生産状況を推察したい。

矢加部町屋敷遺跡からは大きく、三葉文・菊花文・宝珠形三葉文を中心飾りとする瓦当文が見られるが、このうち製作地の刻印を持ち、久留米市・みやま市・大川市で類例の出土する前2者について検討する。まず三葉文だが、これは播磨系工人が製作するモチーフとして知られており、瀬戸内を中心とした西日本に広汎に見られる。モチーフを比較すると、本遺跡2次調査2号溝状遺構出土の140図22は、久留米市城下町の佐々木家屋敷遺跡出土軒平瓦B類の1つに酷似している。同範ではないが、同じ工房で生産された可能性は高い。これに対して140図23は唐草のモチーフに類例がないで、柳川で生産されたものかもしれない。

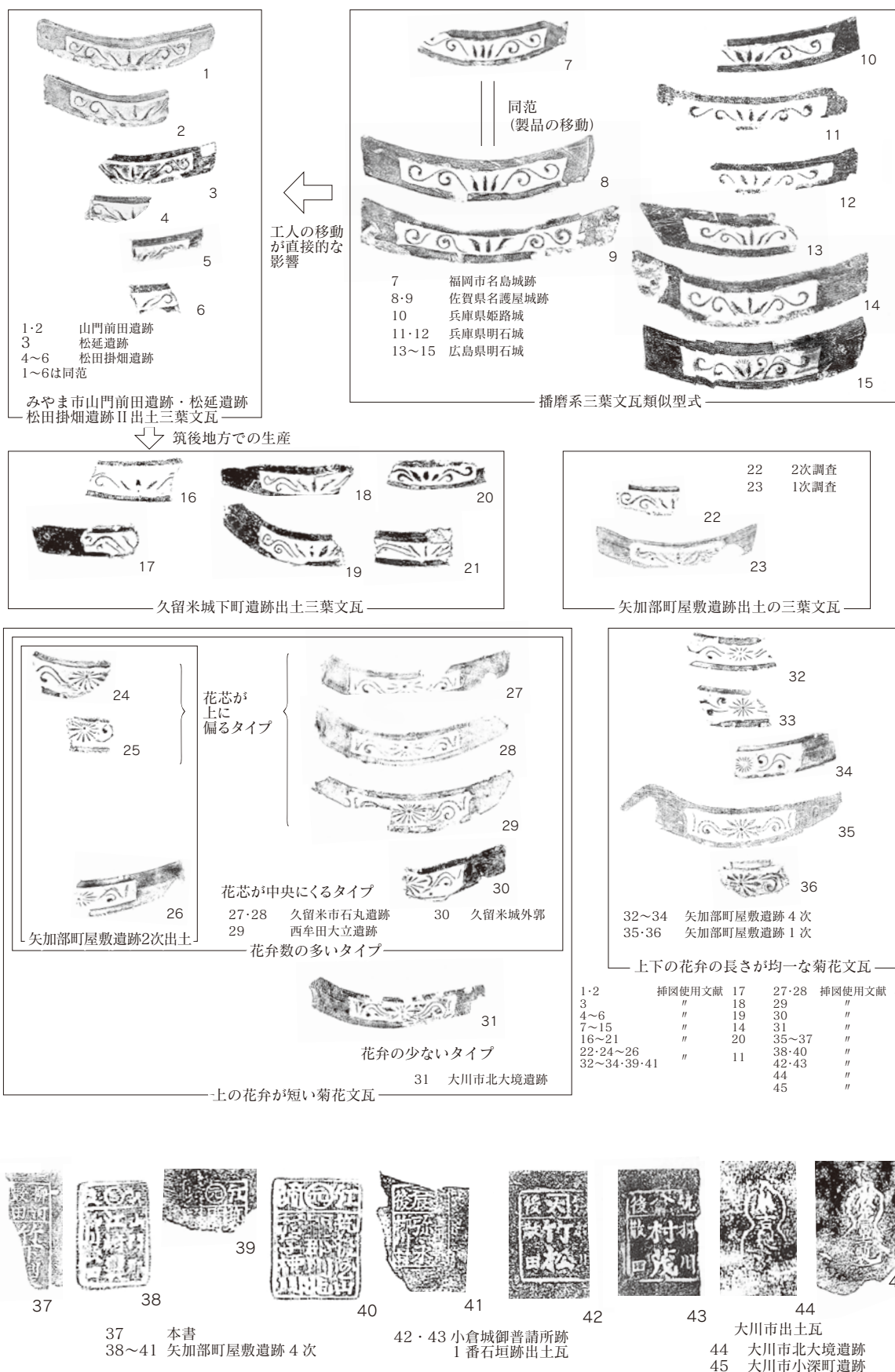
久留米城外郭佐々木家屋敷遺跡出土瓦は18世紀代に製作されたものが廃棄されたと考えられる。久留米市三本松町遺跡SK21出土品は写真の掲載しかないが、第2唐草文の先端が反る特徴が140図18と一致しており、三本松SK21は18世紀前半の遺構なので、140図22は18世紀代に久留米市域で製作されたものとみてよい。

一方、みやま市山門前田遺跡・松延遺跡・松田掛畑遺跡で出土した三葉文軒平瓦(140図1～6)は、近接地点から出土した同範品である。松田掛畑遺跡では17世紀末から18世紀初頭の遺物を主体とする18世紀後半以前の遺物に伴っているので、それ以前に製作されたものである。

このモチーフに類似するのは福岡市名島城跡出土の140図7や広島城跡出土の140図14など17世紀代の瓦なので、これらも17世紀代の可能性が高い。山門前田遺跡では、鯨瓦や鬼瓦など寺社や富裕層でしか使わない道具瓦が出土しており、近隣で当てはまるのは立花宗茂が社領15石を寄進して祈願所とした松延天満神社しかない。立花宗茂がこの神社を再興したのが天正16(1588)年なので、瓦の使用年代とも一致する。これらが柳川藩内で生産されたのか、久留米藩内産かわからないが、筑後地域の三葉文では最も古相であることから、以後の三葉文軒平瓦はここから変化したものだろう。

次に、菊花文を中心飾りとする軒平瓦だが、本遺跡ではさまざまなバリエーションが出土している。久留米市域の出土品は140図27～29のように菊花文の花芯が上に偏り、花卉数が多く、花卉自体も長く先端がやや太い特徴を持つ。久留米市石丸遺跡第6次調査SD40出土瓦(140図27・28)は共伴する肥前陶磁器から18世紀後葉に廃棄されたものと考えられる。また、久留米市三潞町西牟田大立遺跡でも明治期のもの(140図29)が出土しており、同じ特徴を有したまま、モチーフが変化したことがわかり、これらは久留米市域で製作された可能性が高い。一方、花卉数が少ないものは、本遺跡に多く存在する。(140図32～36)それ以外にも大川市北大境遺跡瓦溜SK1(140図31)にも見ることができ、これらは柳川市域の特徴であろう。

本遺跡出土の140図37には「柳川散田」の刻印がある。「柳川散田」とは三橋町蒲船津地区のこと



第140図 棧瓦・軒平瓦瓦当文と刻印の比較図

で、近世・近代には瓦生産が盛んだったらしく塩塚川の対岸には現在も江崎洋瓦本店が存在しており、刻印に「散田」と記されたものは小倉城にも見ることができる(140図42・43)。大川市北大境遺跡瓦溜1には「藤吉製」・「三橋」(140図44)の刻印を持つ瓦を伴っており、大川市小深町遺跡と同じ瓢箪文の中に「枝光富吉製」の刻印がある(140図45)ことから、これらは柳川市三橋町で生産された可能性が高く、大川市域の旧柳川領内では柳川産の瓦が流通していたようだ。柳川市域では製品や材料の運送に水運を利用するために柳川市の中心部を通る塩塚川沿いに小規模な瓦製作所が点在していたことがわかる。

以上のように、筑後地域の近世の軒平瓦は、久留米市域・柳川市域・みやま市域ともに、18世紀後半代に三葉文から菊花文に移行したことがわかる(注6)。この動態は唐津城にも見られるが、相互に関連があったかは現段階ではわからない(引用文献12)。

土師質瓦について

『矢加部町屋敷遺跡Ⅱ』ですでに土師質瓦については述べたが、その機能は茅葺屋根の棟に葺く「雁振瓦」と雨樋に使用する「樋瓦」(写真3-4)である。5次調査ではこの使用方法を傍証する変色のある資料が出土したので、カラー写真(写真4)を掲載した。42図2・6は「樋瓦」で、2は凸面側から基部に褐色の付着物があり、凹面側には見られない。これは凸面側が煙などに燻され、凹面側は水が流れるので付着しなかったためである。6の凹面側の中央部だけが暗褐色に変色しているのは、この部分に汚水が流れたことを示している。

43図4は雁振瓦(写真3-1～3)で、凹面側が煤で変色しているので屋内の煙が茅葺屋根を通して付着したものである。また、内外側端部だけが器面が剥落しているのは写真3-1のように漆喰で固めた部分が剥落したためと考えられる。

上述の「樋瓦」は有明海沿岸に特徴的に分布する近世の漏斗造り家屋の雨樋に使われるものである。

より広く分布する平面コ字形の「くど造」の家屋の場合、中央に集まった雨水を口の開く部分に屋根瓦を葺いて排水することができるが、平面コ字形の「漏斗造」は開口部がないため、屋内に排水路を通すことになり、屋内の天井に平瓦を縦に並べて雨樋にしたものである(写真3-5・6)。ここには通常の平瓦より大型のものが使われ、『福岡県の民家』では雁振瓦を転用とした「テイ瓦」と報告している(文献13)。しかし、凸帯が凹面側につくものと凸面側につくものを同じように使用していたとは考えにくく、当初は転用であったが専用に発展したのかもしれない。

前述したように「くど造り」家屋の場合、開口部に排水のための瓦を葺く必要があり、本遺跡から出土する少量の近世の燻し瓦や土師質の軒丸瓦は、屋根全体や軒先のみに使用したのではなく「くど造り」家屋に使用した瓦と考えられる。したがって、矢加部町屋敷遺跡には「漏斗造り」家屋と「くど造り」の両方が存在していたであろう。『福岡県の民家』(引用文献14)によると、「漏斗造」家屋は「くど造り」家屋の発展形であり、「くど造り」家屋の分布域の中により狭い範囲で点在するという。したがって、両者が混在していても不自然ではない。

双方とも軟弱地盤対策のための建築様式であり、第141図3のように「クド造り」家屋は柱間が他の屋根構造の民家よりも狭く、それだけ屋根の重量を多くの柱に分散できるので軟弱地盤には適しているとされている。しかしながら、「クド造り」家屋は軟弱地盤でない山間部にも見られることから、本来の意味とは無関係に伝統的な様式として伝播したのかもしれない。それに比べて「漏斗造り」については顕著な分布上の偏りが見られ、佐賀県側の調査では、「漏斗造り」は福岡県



4 漏斗谷の樋吐出口

1 「漏斗造」の家屋全景



5 漏斗造の樋見上

2 漏斗屋根の俯瞰



6 同上

3 同上近写 福岡県教育委員会『福岡県の民家』より

写真3

土師質瓦の使用状況

- 1・6 柳川市梅崎武美氏宅
- 2・3 久留米市城島町江口伊吉氏宅
- 4・5 柳川市松藤キヨ氏宅



42図2



42図6



43図4

写真4

使用変色のある土師質瓦

側の東部に偏って分布している。福岡県でも久留米市内では「樋瓦」は出土していないようで、『久留米市史』の民家の記録にも「クド造り」はあるが、「漏斗造」はない(引用文献15)。筑後市内では「樋瓦」が見られるので、福岡県内では筑後市域を北限とする狭い範囲に限定されるようだ。また、雁振瓦については、久留米市京隈侍屋敷遺跡第5次SK141で出土しているものが北限であろう。突帯が突面に付く冠瓦状のものは佐賀県内にもあるようだが、水田の赤瓦の産地である筑後市水田地区の筑後市水田上町遺跡SK015(文献16)にも見られるので、必ずしも佐賀県内のものが搬入されたものではないだろう。土師質の雁振瓦の分布は樋瓦よりも広がったものと思われる。

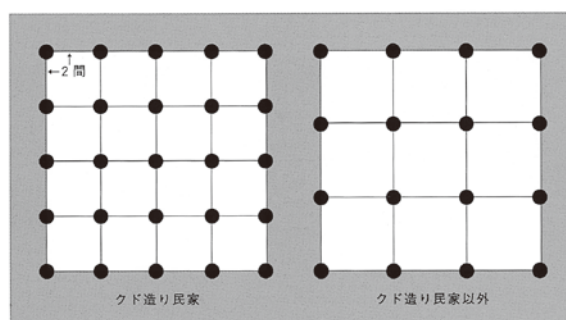


- 「くど造り」分布限界線
- ++++ 「くど造り」主要分布地域
- //// 「二ツ家(熊本二棟造り)」分布地域

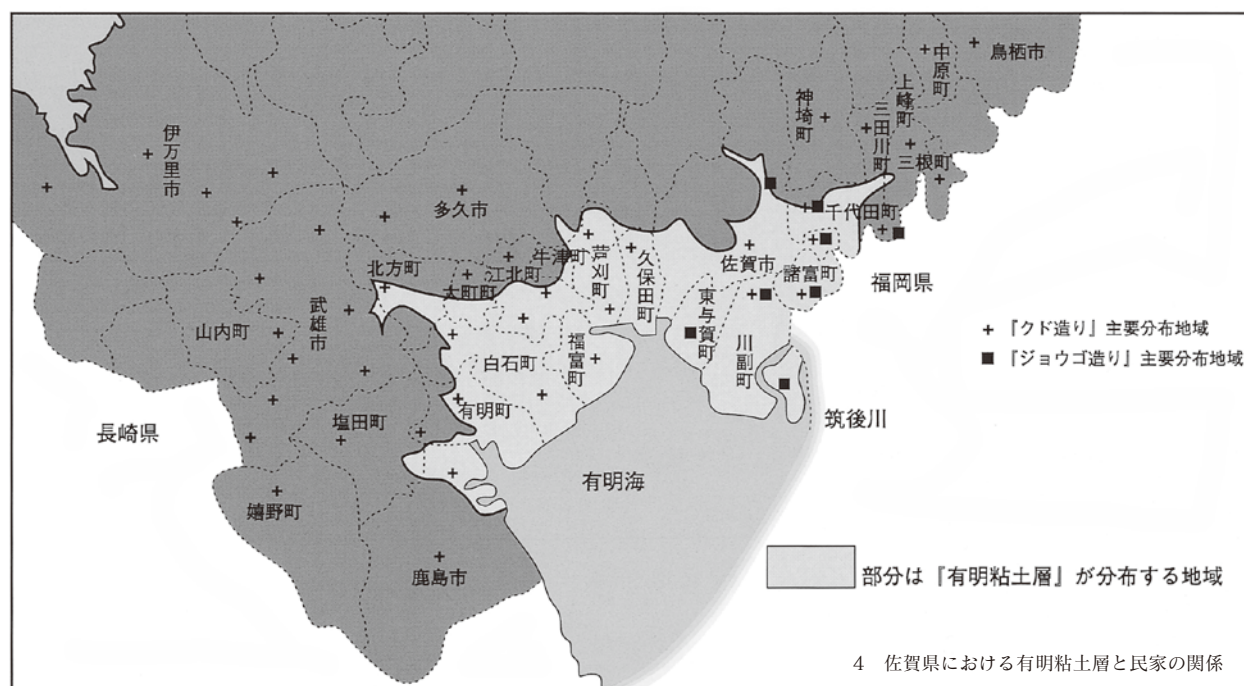
1 二ツ家・くど造り民家分布図



2 二ツ家造り民家 熊本県玉名郡玉東町境家 川島寅次『民家の来た道』より



3 民家・柱配置模式図



4 佐賀県における有明粘土層と民家の関係

1～3・4は 佐賀県立博物館『有明海・博物誌』より

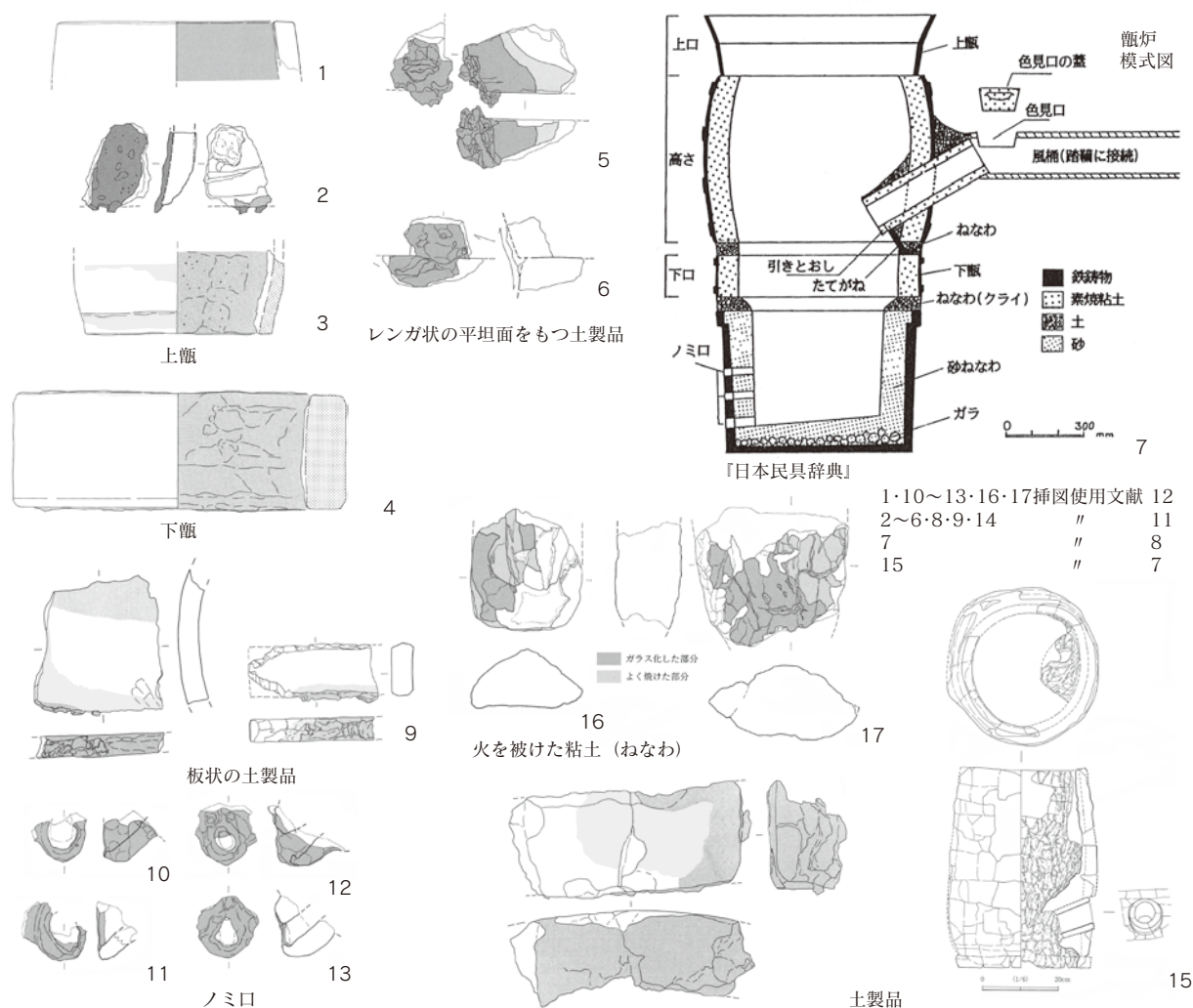
第141図 「くど造り」「漏斗造」家屋の分布と柱配置模式図

棒状土製品

『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』の中でも窯道具の可能性については述べたが、鋳型など鋳造関係遺物が多く出土していることから再考し、こしき炉の壁体の可能性も指摘しておきたい。

棒状土製品の中の大型で湾曲しているのものと、瓦片を転用しているものが中央部だけが焼けない理由が窯道具としてはわからなかったので、ここではこしき炉の部材と考えたい。142図2・3は器壁の薄い炉の壁体、外面に粘土を貼って使用し、142図6・7は積み重ねて使用するものであり、これらは第142図7のようなこしき炉であっただろう。142図10から13は溶解した金属の出るノミ口であろう。142図14は大型の棒状土製品で、142図15のようなこしき炉の上甗の壁体ではないかと考えた。比熱を受けた燻し瓦片(142図8・9)が側端部のみ焼けて中央部だけ焼けないのは、こうしたこしき炉の部材の隙間に挟んだため、重なった部分だけが焼けなかったためだろう。142図16・17のような粘土塊もこしき炉の充填粘土であったのではないだろうか。

家屋の密集する町屋で鋳掛屋を営むには炉は小規模なものであろうから、こしき炉を使った可能性は十分にある。



第142図 矢加部町屋敷遺跡出土鋳造関係遺物とこしき炉の例

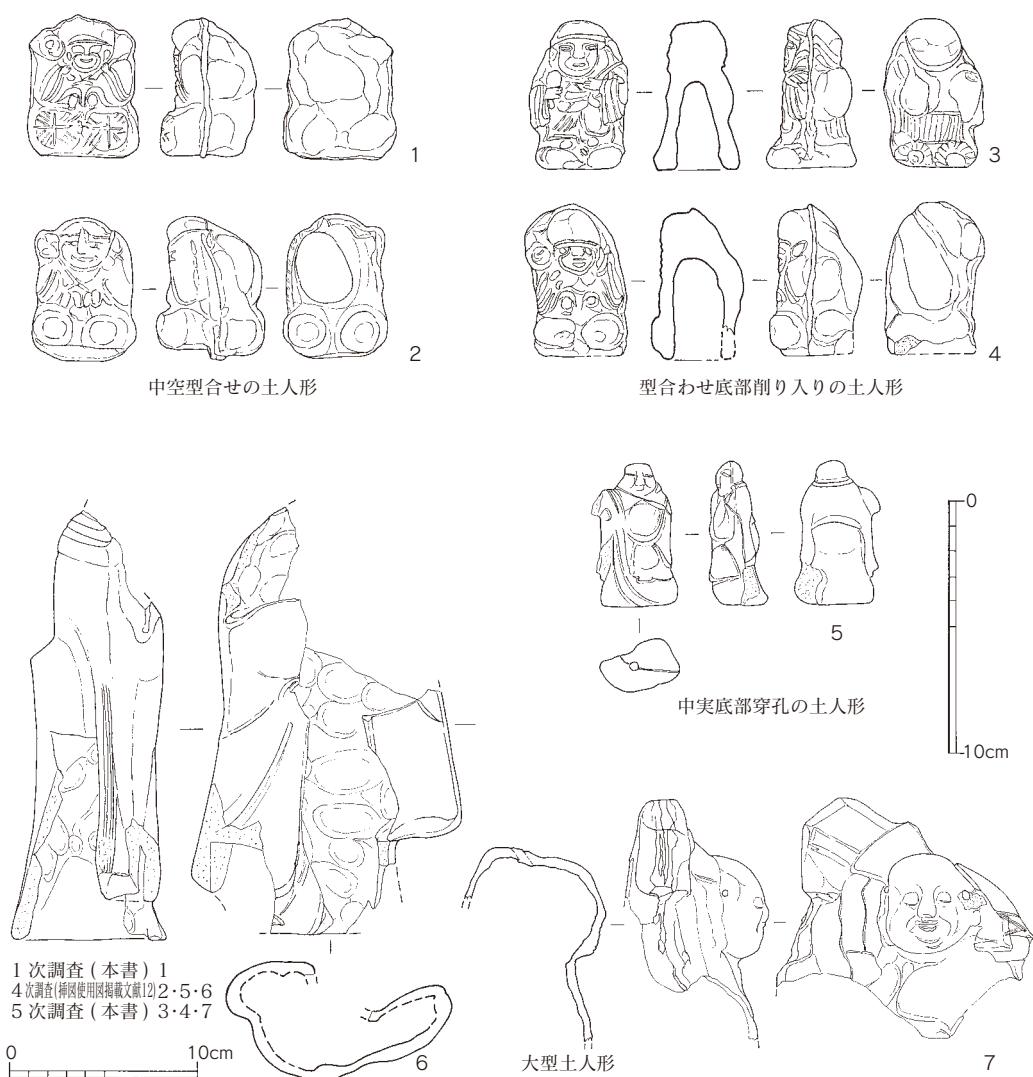
土人形

土人形で多く見られたのは、大黒天と恵比寿像だが、本遺跡は町屋でなので商売の神様として信仰されたのだろう。『久留米市史民俗編』によると、「かせどり」といって、元旦の夕方に女の人が土製の大黒天などを持って訪れ、餅や銭をもらった。赤坂の土鳩笛もこれに使用されたという」という記載がある(引用文献17)。「かせどり」とは「かせぎどり」として他地域にも見られる習俗で、地域によって差異があるが、正月や新生児の祝いに各戸をまわって祝いの品を送ったり、なんらかの行為の返礼の品をもらったりする点で共通している。欠損していないものが必要以上に多量に出土しているのは、毎年購入する縁起物であったためだろう。

これらの神像は底面からへうで削りを入れないもの(144図1)と入れるもの(144図2)の2種類の成型技法が見られる。

へうで削りを入れるものは粘土塊を表裏の型に入れた後、中実にならないように内部に空間を設けて焼成を良くしようとしたものであり、削りを入れやすいように頭部が向かって細長い形態になっている。

一方、挟りがなく、平底のものは表裏の型にそれぞれ粘土板を貼って、接合しているため中空

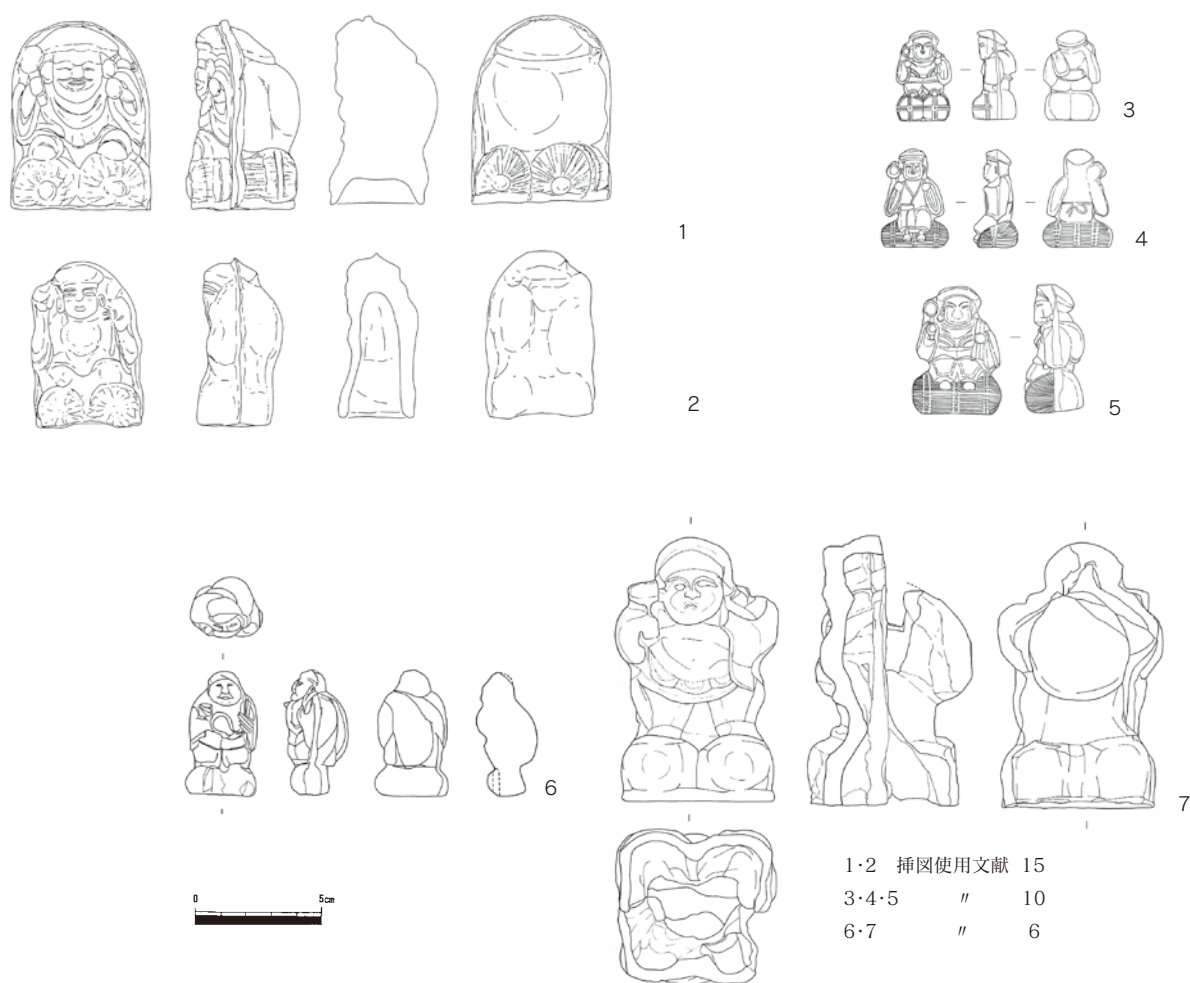


第143図 矢加部町屋敷遺跡出土の主要な土人形(6・7は1/4、他は1/3)

になっている。そのため接合痕を十分に削ることができずに大きな痕跡を残すのである。底部にへうで挟りを入れる必要がないので、前者に比べて膨らみのあるものが多い。挟りを入れる方の胎は赤茶色の色調に鉄分と思われる褐色パミスが多く含んでおり、入らないものは精良な黄白色で器面の劣化が少ないという胎土の相違がある。胎土も製作技法も異なるので、産地が異なっていると考えるべきだろう。

近世の筑後市内には赤坂人形と水田人形という土師質土器窯で製作された土人形があり、赤坂人形については現在も製作が続いており、店舗で先代製作者の作品を見ることができる(注8)。赤坂人形は「不器用」という意味から「ててぼっぼ」と呼ばれ、接合痕を残す点に特徴があるらしい。現代の赤坂人形の大黒天には厚みがあり、型に粘土板を貼る方法で製作している。このことから、挟りが入らず接合痕を残すものを赤坂人形とし、挟りの入るものは水田人形としたい。本遺跡で挟りの入るものが多く出土するもの、水田焼の窯場の方が近いためであろう。水田人形はつくりが良く大型人形も作ったらしく、120図1から5や4次調査出土(『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』第55図16・17)の大型品は水田人形であろう。

なお、『久留米市史』民俗編(引用文献18)によると、土人形は「金丸川付近の久留米高等学校工程の粘土で製作した」とあり、赤坂人形・水田人形とは別に久留米市内に土人形の製作地があっ



第144図 福岡・北九州・筑後市域出土の土人形(1/2)

たらしい。久留米城下町からは確かに赤坂・水田人形とは異なる形態のものが出土しており、本遺跡で出土する赤坂・水田人形以外の人形は久留米城下町産のものかもしれない(注9)。

焼塩壺

本遺跡で出土した焼塩壺は、すでに久留米市城下町の京隈侍屋敷遺跡第5次SK141・第7次SK150(引用文献19・20)などで出土しており、塩壺として報告されている。筆者の知見では、江戸時代の福岡城下町でも小倉城下町でも筑後地方焼塩壺は出土しておらず、流通圏は筑後地方に留まるのではないだろうか。

このように筑後地方の焼塩壺についてはすでに知られていたが、セットになる蓋の存在はわかっていなかった。焼塩壺は蓋をして焼成するので(写真5-3)、焼塩壺にはセットになる蓋が存在するはずであるが、本遺跡では写真5-2のように口縁部が赤くなった焼塩壺に伴って内外面に赤い輪ができていた土師皿が出土し、ちょうど赤変する範囲が一致したので、土師質土器の小皿を蓋にしていたことがわかった(写真5-1)。これまで確認されなかったのは、蓋は土師質小皿として再利用され、灯明皿に転用されることが多いので、小皿や灯明皿として認識されていたためである(写真5-4)。

焼塩壺の蓋となる小皿は外面回転ナデの後、スリップを掛けるような静止ナデが見られる。この特徴は焼塩壺にも見られ、蓋にはならない小型の土師皿(写真5-5)にも見られるので、同じ産地で作られたものである。この土師質小皿は灰白を呈する精良な胎土から蒲池焼と想定しているので、必然的に焼塩壺も柳川産と考えられる。この精良な胎土の小皿は、蒲池地区に所在する東蒲池西門前遺跡(注11)の戦国時代の土師器にも見ることができたので、蒲池地区で作られた土師器の伝統を引くものと考えられる。雑器については厳密な意味では蒲池焼ではないのかもしれないが、蒲池に土着し土器司として在来の工人を統括したとすれば、雑器もまた蒲池焼としてよいのではなかろうか。

以上のように今回の矢加部町屋敷遺跡の調査によりいろいろな知見が得られたが、筆者の考察したものなので、今後の筑後地域の近世遺跡の調査の中で検証していただきたい。

最後に長期間にわたる発掘調査に際しては、振動や騒音により周辺住民の方々にはたいへんなご迷惑をお掛けしました。発掘作業に参加していただいた方々には、足場の悪い中で強粘土を掘削していただき、ご苦勞に感謝申し上げます。今回の調査で、福岡県内の近世遺跡・遺物の研究が進展するとともに、全国的な近世遺跡・遺物の研究に役立つことを望みます。

注

- 1 久留米第四八歩兵連隊は明治30(1897)年福岡県久留米市国分町に創設され、主として佐賀県、福岡県の南部地区、長崎県の一部が兵役につく部隊で、連隊前には田中軍人デパートという軍人に記念杯など記念品を販売する専門店があったらしく、そこで販売されたものだろうか。
- 2 磁器杯の形態は従軍記念杯と同じものだが、個人名のみが書かれた例は知見にない。地元の古老によると町矢加部地区には野田姓は3軒あり、4次調査区で近代の「野田正人」の表札(『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』図版12-10)が出土しているので、調査区付近に野田氏の宅地が存在していたことは間違いなく、親類縁者にあたる人物からもらったのだろう。
- 3 「寛保年間柳川藩領図」は「寛保年中柳河藩領図」ともいわれているが、寛保年間(1741～1743)である根拠はなく、年代が遡る可能性があるとしてされている。
- 4 蕎麦の盛んな地域でもあるので、大型土坑については草の泥染め用槽の可能性も考えたが、泥染めは大正13(1924)年頃から普及したもので、それまではクリークで洗って天日干しする習慣らしく、これは当てはまらない。(文献22)また、『大川市の民俗』(文献20)によると、三丸地区西田口の項で、「水田を地下げして出た土を瓦屋に売りにいく専門の人がいた」という記事があり、粘土の採掘孔の可能性もない。
- 5 この記事は『福岡県花菰治草誌』の記事らしいが、文献22には引用文献の記載がなかった。

- 6 久留米市内の城島で作られる瓦と柳川市・みやま市で作られる瓦の間には僅差しかなく、城島瓦の系譜を引く瓦が南筑後に広がっている、これらは「城島系瓦」というべきだろう。
- 7 博多遺跡群第62次調査2203号遺構は12世紀後半から13世紀初頭のこしき炉で、径80cm程の小型の炉で、銅の铸造用であった(文献24)。
- 8 赤坂人形は野口紘一氏で5代目で、店舗に展示しているのは先代野口文蔵氏の作品である。
「福岡県特産民芸品指定の赤坂人形赤坂人形製作窯元 赤坂鮎本舗」として現在も営業している。『矢加部町屋敷Ⅰ』第41図3の鳩笛片は同範と思われる型が残っており、『矢加部町屋敷Ⅲ』第56図7はまったく同じ製品が残っている。矢加部南屋敷出土の笛(『矢加部南屋敷遺跡矢加部御反田遺跡』第38図11)も現代の製品に類似する形態のものがあるので、赤坂人形であろう。
- 9 佐賀県神崎市に尾崎人形という土人形の製作地がある。ここで製作された鳩笛は『矢加部町屋敷遺跡Ⅰ』41図1の鳩笛に近い。また、三養基郡北茂安町白壁の白石焼でも鳩笛を作っていたらしく、久留米市内と筑後市内、佐賀県内の製作地の土人形が流通していたようだ。
- 11 九州歴史資料館で整理中。

引用文献

- 1 城島町教育委員会1994『北ノ屋敷遺跡』城島町文化財調査報告書第1集
- 2 大川市教育委員会2002『榎津調査報告』『大川市民俗聞き取り調査報告書(第一集) 大川の民俗』
- 3 川勝政太郎1980『梵字講話』株式会社河原書店
- 4 福岡県教育委員会2009『矢加部南屋敷遺跡 矢加部五反田遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第5集
- 5 大川市教育委員会2002『向島調査報告』『大川市民俗聞き取り調査報告書(第一集) 大川の民俗』
- 6 久留米市史編纂委員会1986『第7編 久留米の民俗 第5節 俗信』『久留米市史第5巻』
- 7 柳川市史編集委員会2001『山門郡柳河村他地誌』『柳川市史 史料編Ⅰ』
- 8 大川市教育委員会2008『三丸調査報告西田口』『大川市民俗聞き取り調査報告書(第四集) 大川の民俗』
- 9 福岡県い製品商工業共同組合1996『福岡県の蘭業誌』
- 10 文献8
- 11 文献7
- 12 『第4節瓦』唐津市教育委員会2005『唐津城跡(Ⅳ)』唐津市文化財調査報告書第123集
- 13 福岡県教育委員会1972『福岡県の民家 民家緊急調査報告書』
- 14 文献12
- 15 久留米市史編纂委員会S61『第7編 久留米の民俗 第3節 住』『久留米市史第5巻』
- 16 筑後市教育委員会2005『水田上町遺跡Ⅰ』筑後市文化財調査報告書第63集
- 17 久留米市史編纂委員会S61『第11編久留米の民俗 第3節 郷土玩具』『久留米市史第5巻』
- 18 文献17
- 19 久留米市教育委員会2006『京隈侍屋敷遺跡第5次発掘調査』久留米市文化財調査報告書第220集
- 20 久留米市教育委員会2008『京隈侍屋敷遺跡第7次発掘調査』久留米市文化財調査報告書第266集
- 21 久留米市教育委員会1996『久留米城両替町遺跡発掘調査』久留米市文化財調査報告書第116集
- 22 文献9
- 23 文献8
- 24 福岡市教育委員会1995『博多48』福岡市埋蔵文化財調査報告書第397集

挿図使用図掲載文献

- 1 大川市教育委員会1999『北大境遺跡』大川市文化財調査報告書第8集
- 2 大川市教育委員会2001『小深町遺跡』大川市文化財調査報告書第10集
- 3 久留米市教育委員会1992『久留米市三本松町遺跡』久留米市文化財調査報告書第74集
- 4 久留米市教育委員会2001『Ⅱ. 石丸遺跡(第6次調査)』『平成12年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第175集
- 5 佐賀県立博物館1999『平成10年度佐賀県立博物館企画展 有明海博物誌』
- 6 財団法人北九州市教育文化財団埋蔵文化財調査室2000『堅町遺跡第1地点』北九州市埋蔵文化財調査報告書第244集
- 7 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター2002『郡司铸造所跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第30集
- 8 日本民具学会1997『日本民具辞典』
- 9 福岡県教育委員会1972『福岡県の民家 民家緊急調査報告書』
- 10 福岡県教育委員会2001『西新町遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第157集
- 11 福岡県教育委員会2007『矢加部町屋敷遺跡Ⅰ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第3集
- 12 福岡県教育委員会2011『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集
- 13 柳川古文書館2005『秀吉を支えた武将 田中吉政』
- 14 山崎信二2008『近世瓦の研究』奈良文化財研究所学報第78冊
- 15 筑後市教育委員会2005『水田上町遺跡Ⅰ』筑後市文化財調査報告書第63集
- 16 川島寅次1992『民家の来た道』
- 17 福岡県教育委員会2006『山門前田遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集
- 18 瀬高町教育委員会1998『瀬高地区遺跡群Ⅱ』瀬高町文化財調査報告書第15集
- 19 みやま市教育委員会2010『松田掛畑遺跡Ⅱ 松延城跡』みやま市文化財調査報告書第1集
- 20 久留米市教育委員会1995『久留米城外郭』久留米市文化財調査報告書第96集
- 21 福岡県教育委員会2006『西牟田大立遺跡・西牟田北原遺跡・西牟田平野遺跡(2次調査)』

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第5集

22 (財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室2004『小倉城代米御蔵跡Ⅳ』北九州市埋蔵文化財調査報告書第313集

23 九州歴史資料館2012『矢加部町屋敷遺跡Ⅳ蒲船津西ノ内遺跡蒲船津水町遺跡』有明海海岸道路

大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集

参考文献

江戸遺跡研究会2001『図説江戸考古学研究事典』柏書房株式会社

秋田裕毅2002『ものと人間の文化史104 下駄』法政大学出版局

大分市歴史資料館H3『第10回特別展 九州の土人形』

福岡県教育委員会2008『矢加部町屋敷遺跡Ⅱ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集

渡辺誠1992「焼塩壺 補注1・3」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会編 吉川弘文館



81図11
1 81図2・11



写真5

焼塩壺の蓋と見られる小皿と
蛍光X線分析試料写真

4. 矢加部町屋敷遺跡の自然科学系の分析

矢加部町屋敷遺跡出土赤色顔料の保存科学的調査

九州歴史資料館 加藤 和歳

1. はじめに

古代日本において出土赤色顔料は、鉱物である辰砂を粉状にしたもので、硫化水銀を主たる成分とするものである朱と、鉱物としての赤鉄鉱を粉状にしたものや磁赤鉄鉱を焼成して得るもの、その他、鉄細菌、鉄錆が由来となる、酸化第二鉄を主たる成分とするベンガラの二種類に大別できることがこれまでの研究から知られている。

本稿では、福岡県柳川市矢加部町屋敷遺跡から出土した硯(写真5-8)および播鉢(写真5-6)に付着した赤色顔料の種類を同定することを目的とし、保存科学的手法により調査を行った。

2. 調査方法

まず、デジタルマイクロスコープを用いて、20～100倍程度の倍率で、顔料の付着状態を観察し、遺物本体が赤色を発しているのではないことを確認した。その後、顔料付着箇所を、直接、蛍光X線分析法により、含有される元素を定性的に分析した。

赤色顔料の場合、冒頭で述べたように、各種の顔料において、朱である場合、水銀(Hg)、ベンガラである場合、鉄(Fe)というそれぞれに特徴づけられる元素が含まれており、これらの存在によって、顔料を種類の推定を行うこととした。

測定は九州歴史資料館にて行い、測定機器および分析条件は以下のとおりである。

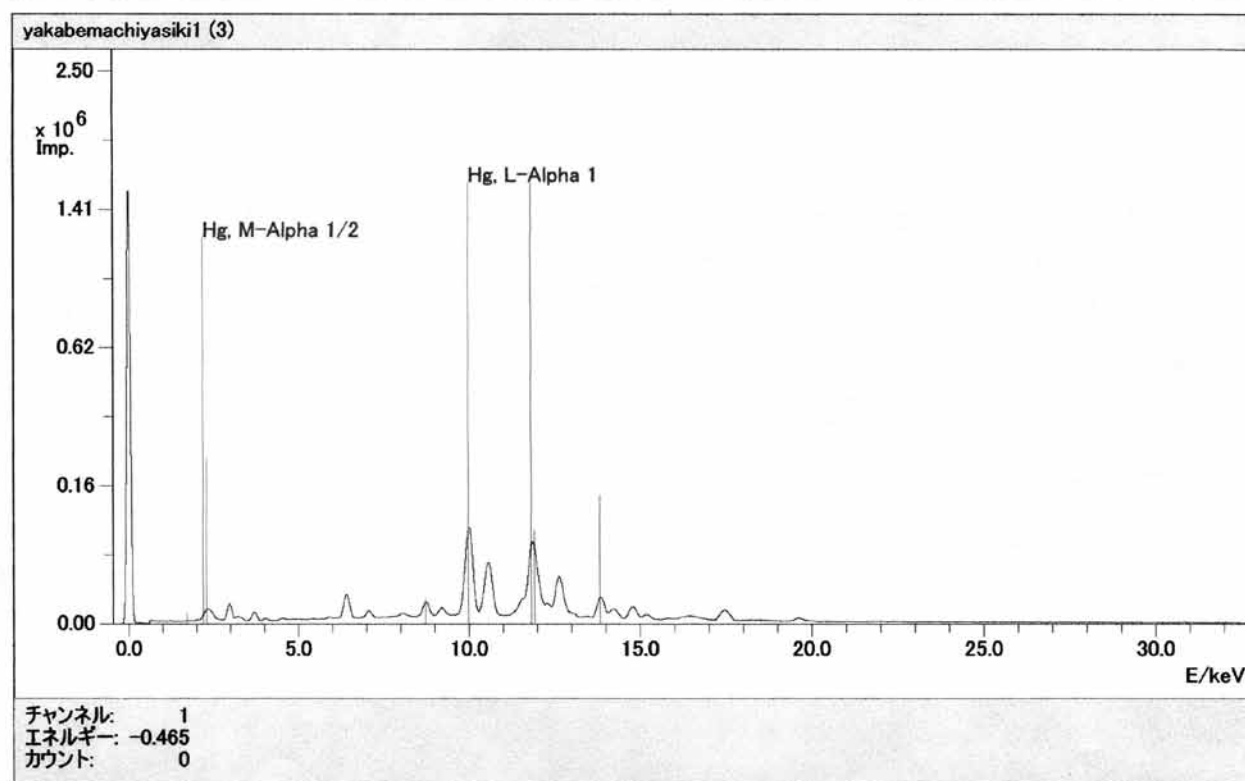
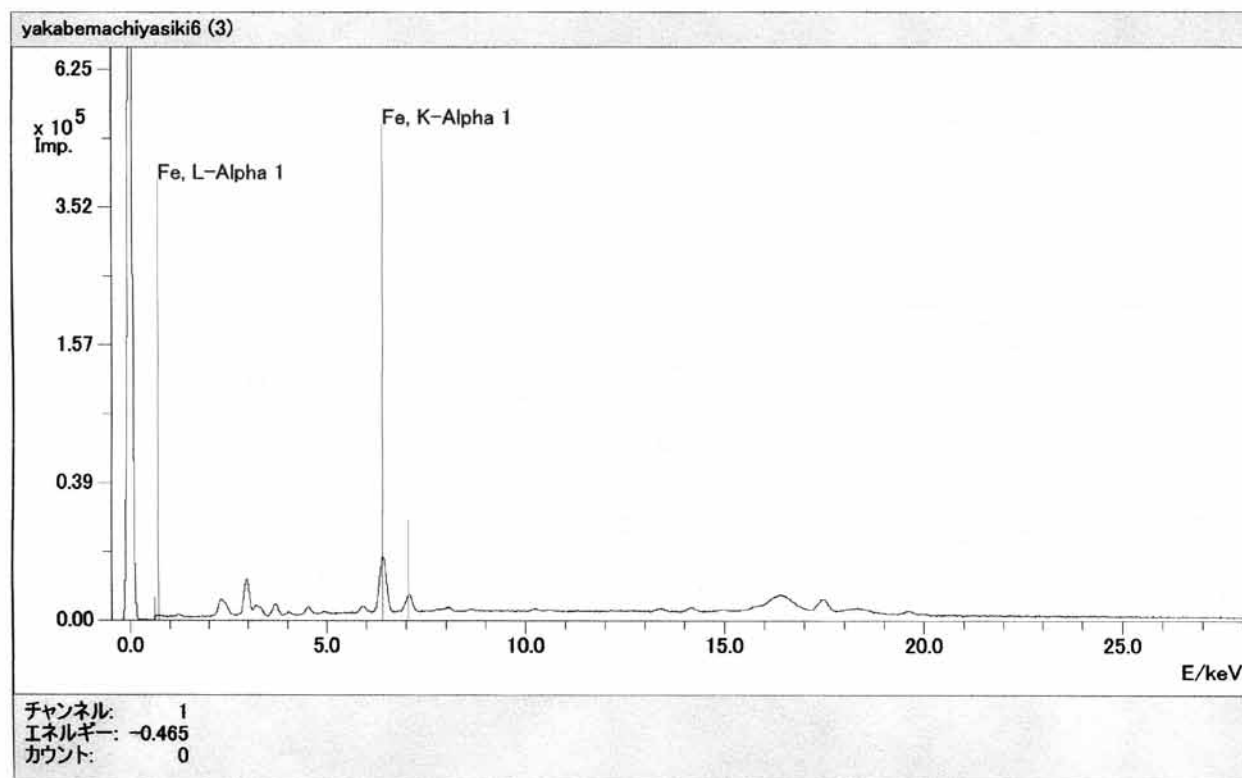
- ・使用機器：エネルギー分散型蛍光X線分析装置(SPECTRO MIDEX)
- ・分析条件：電圧 45kV/電流 0.3mA/対陰極 モリブデン(Mo)/検出器 シリコンドリフト検出器/測定雰囲気 大気/測定範囲 0.3ミリ/測定時間 300秒

3. 調査の結果

推定にあたっては、主たる元素の存在を、検出されたスペクトルのピークから定性的に判断をおこなった。

まず、硯については、水銀(Hg)のピークが明瞭にみられることから、この赤色顔料は朱であると推定できる。硯に付着しているということから考えて、顔料というよりは、書入れの朱である可能性を指摘することができよう。

次に、播鉢であるが、鉄(Fe)が検出され、水銀(Hg)は検出されなかったことから、この赤色顔料はベンガラであることが推定できる。なお、比較として播鉢胎土部分の測定も行ったところ、胎土由来と考えられるケイ素(Si)やアルミニウム(Al)のピークがみられた。顔料にはそのピークがみられないため、赤色部分は鉄(Fe)であると判断できる。この町屋敷跡において、ベンガラを播り潰す作業が行われていたのかと、窺うこともできよう。



第145図 摺鉢(上)・硯(下)付着赤色顔料蛍光X線スペクトル図

矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ スタルシャン(パレオ・ラボ)

1. はじめに

矢加部町屋敷遺跡は福岡県柳川市矢加部に位置する17世紀後半から19世紀中葉の町屋遺跡である。遺跡は久留米柳川往還に面し、有明海沿岸に立地する。堆積物は粘土が主体で、動植物遺体の遺存状況が良い。ここでは、土坑から出土した大型植物遺体を同定し、食用などに利用された植物あるいは遺構周辺での栽培状況や植生について検討する。なお、同定にあたっては、千葉大学園芸研究科百原新氏のご教示を得た。

2. 試料と方法

試料は、福岡県教育委員会が堆積物の水洗と状態が良好な種実の抽出を行った7試料である(一部未水洗)。1試料中には、1点の種実を含む試料もあれば多種の種実が多数混合した試料もあった。少量の種実を含む試料は、調査時に目視で取り上げられ、多量の種実を含む試料は、パンケース1箱分の堆積物を2mm目の篩で水洗されたものである。試料の内訳は、1次地点の土坑3(試料No.1, 4)と土坑26(試料No.3)、4次地点の土坑7(試料No.5)と土坑12(試料No.2)、土坑80(試料No.7)、土坑84(試料No.6)である。各土坑の詳細な時期は、古い方から4次地点の土坑84が17世紀中葉～後葉、1次地点の土坑26が18世紀中葉、1次地点の土坑3が19世紀初頭、4次地点の土坑7は19世紀中葉で、4次地点の土坑12と80は時期不明である。

試料は、一部の再水洗と表面のクリーニングをした上で、肉眼および実体顕微鏡下で大型植物遺体の抽出・同定・計数を行った。計数が困難な試料や多数含まれている試料は記号(+)で示した。試料および残渣は福岡県教育委員会に保管されている。

3. 結果

同定した結果、木本植物ではヤマモモ核と、クリ果実、コナラ属果実、クスノキ核、ウメ核、モモ核、サンショウ炭化種子、ウルシ炭化内果皮、カキノキ属炭化種子の9分類群、草本植物ではトウガン果実・種子と、メロン仲間種子、カボチャ種子、ヒョウタン仲間種子、ヒシ属果実・炭化果実、ナス属種子、オオムギ炭化種子、イネ籾殻・炭化籾・炭化種子、ホタルイ属果実の9分類群の計18分類群が見いだされた。このうちトウガンには、果実内に多数の種子を残したまま保存されていた試料があり、これらの試料についてはこの状態で果実・種子1として計数した。このほかに科以下の識別点が残存していない一群を同定不能炭化種実とした。単体で出土した種実 は完形で3767点、破片で243点であった。

以下に、産出した種実について地点および遺構別に記載する(同定不能は除く)。

[1次地点]

土坑3(19世紀初頭): ウルシが非常に多く、イネがやや多く、メロン仲間とヒシ属が少量、クリとクスノキ、ウメ、トウガン、カボチャ、ナス属、オオムギがわずかに得られた。

土坑26(18世紀中葉): ウルシとイネがやや多く、コナラ属とカキノキ属、ヒシ属、ホタルイ属がわずかに得られた。

[4次地点]

表65 矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体(括弧は破片を示す)

分類群	部位/試料No.	1次		4次				
		土坑3		土坑26	土坑7	土坑12	土坑80	土坑84
		19世紀初頭		18世紀中葉	19世紀中葉	不明	不明	17世紀中葉 ～後葉
		No.1	No.4	No.3	No.5	No.2	No.7	No.6
ヤマモモ	核					1		
クリ	果実		(6)					
コナラ属	果実			(1)				
クスノキ	核	2 (1)						
ウメ	核	1	(1)					
モモ	核				1			
サンショウ	炭化種子					1		
ウルシ	炭化内果皮	1061 (27)	1	34 (2)			1	
カキノキ属	炭化種子			(4)				
トウガン	果実・種子							2
	種子	7				2362 (111)	2 (50)	
メロン仲間	種子	16				3 (5)	247	
カボチャ	種子	9 (5)						
ヒョウタン仲間	種子					2		
ヒシ属	果実	1 (21)	(3)	(1)				
	炭化果実	(1)						
ナス属	種子	1						
オオムギ	炭化種子	3					1	
イネ	籾殻	(+++)		(++)				
	炭化籾	1					1	
	炭化種子	1		3				
ホタルイ属	果実			1			1	
同定不能	炭化種実	(1)					(3)	

+ : 1-9, ++: 10-49, +++: 50-99

土坑7(19世紀中葉): モモが1点得られた。

土坑12(時期不明): トウガンが非常に多く、ヤマモモとサンショウ、メロン仲間、ヒョウタン仲間がわずかに得られた。

土坑80(時期不明): メロン仲間が非常に多く、トウガンが少量、ウルシとオオムギ、イネ、ホタルイ属がわずかに得られた。

土坑84(17世紀中葉～後葉): トウガンの果実(種子を含む)が2破片得られた。1破片あたり、完形の果実の約1/4が残存しており、2破片をあわせると完形の約1/2個体分であった。

以下に、大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1)ヤマモモ *Morella rubra* Lour. 核 ヤマモモ科

淡褐色で、凸レンズ型の扁平な球体。木質で表面は粗い。長さ7.6mm、幅6.6mm、厚さ4.4mm。

(2)クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. 果実 ブナ科

黒褐色で、破片だが、完形ならば側面は広卵形。表面は平滑で、縦に細く浅い筋がみられる。殻斗着痕は果実幅と同じ程度の幅広になり、不規則で微細な丘状の突起が密にある。長さ15.0mm、残存幅10.1mm、厚さ8.8mm。

(3)コナラ属 *Quercus* sp. 果実 ブナ科

茶褐色で、破片だが、完形ならば長楕円形か。果実直径に対し、1/2程度と思われる臍が残る。コナラもしくはウラジロガシか。残存長9.8mm、残存幅5.8mm。

(4)クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) J.Presl 核 クスノキ科

明褐色で、上面観・側面観は円形。表面は平滑で一条の稜がある。光沢があり、壁は薄い。長さ6.8mm、幅6.5mm、厚さ6.2mm。

(5)ウメ *Armeniaca mume* (Siebold et Zucc.) de Vriese 核 バラ科

淡褐色、卵形で上面観は両凸レンズ形。表面には、不規則で深く小さな孔がある。着点は凹む。縫合線に沿って深い溝が入る。長さ17.2mm、幅13.3mm、厚さ8.9mm。

(6)モモ *Amygdalus persica* L. 核 バラ科

黄褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。長さ26.2mm、幅19.4mm、厚さ15.3mm。

(7)サンショウ *Zanthoxylum piperitum* (L.) DC. 炭化種子 ミカン科

上面観は卵形、側面観は楕円形ないし倒卵形。基部側面に稜線があり、内側には短く斜め下を向く臍がある。網目状隆線は細かく低い。種皮は厚く硬い。長さ3.3mm、幅2.7mm、厚さ2.5mm。

(8)ウルシ *Toxicodendron vernicifluum* (Stokes) F.A.Barkley 炭化内果皮 ウルシ科

上面観は中央がやや膨らむ扁平、側面観は中央がややくびれた広楕円形。表面には微細な網目状で中央が凹むディンプルがある。断面を観察すると、内層には波状の壁を持つ縦に長い細胞が配列し、中層では正方形に近い細胞が柵状を呈する。外層は上部が炭化により失われているが、長柱状の細胞が配列する。以上の表面および断面構造からウルシと同定した。任意に抽出した10点の大きさは、長さ3.0~4.9(平均3.7)mm、幅4.2~6.6(平均5.1)mm、厚さ2.0~3.2(平均2.6)mm。

(9)カキノキ属 *Diospyros* spp. 炭化種子 カキノキ科

黒色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で、基部がやや曲がり突出する。表面にはちりめん状のしわが見られる。長さ13.7mm、幅10.0mm。

(10)トウガン *Benincasa hispida* (Thunb.) Cogn. 果実・種子 ウリ科

果実は果皮が残存していないが、黄白色の果肉部分が部分的に残存する。果実の大きさは長軸115.0cm、短軸110.0cm。果肉の内部には種子が残存する。種子は黄白色で、倒卵形。表面は平滑。基部両側に薄い突出部がある。周囲を縁取る肥厚があり、中央部は窪む。任意に抽出した単体出土の種子10点の大きさは、長さ10.8~12.7(平均11.9)mm、幅6.3~7.1(平均6.7)mm。

(11)メロン仲間 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

黄白色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形。表面は平滑で、基部は突出せず直線状の隆線となる。藤下(1984)は、種子の大きさからおおむね次の3群に分けられるとしている。長さ6.0mm以下は雑草メロン型、長さ6.1~8.0mmはマクワウリ・シロウリ型、長さ8.1mm以上はモモルディカメロン型である。任意に抽出した10点の大きさは、長さ6.7~8.2(平均7.5)mm、幅3.0~3.7(平均3.5)mmで、大きさで分類するとほとんどがマクワウリ・シロウリ型であるが、モモルディカメロン型も混じる。

(12)カボチャ *Cucurbita moschata* (Duchesne ex Lam.) Duchesne ex Poir. 種子 ウリ科

淡褐色で、長倒卵形。周縁を毛が取り囲む。長さ16.3mm、幅8.5mm。

(13)ヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* (Molina) Standl. 種子 ウリ科

やや淡黄褐色~褐色で、上面観は扁平、側面観は逆三角形。やや湾曲して左右は非対象、本来ならば先端はW字状で、基部から先端まで、浅く広い溝が2本走る。壁はややスポンジ質。長さ14.3mm、幅6.4mm。

(14)ヒシ属 *Trapa* spp. 果実・炭化果実 ヒシ科

黒褐色で、不整三角形。細く先端が尖った角が2方向にのびる。上位角は細く鋭い。長さ10.0mm、幅14.0mm。

(15)ナス属 *Solanum* spp. 種子 ナス科

褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円形。表面には畝状突起が細かい網目模様がある。着点の一端がやや突起する。ここでいうナス属とは、栽培植物のナス以外のナス属である。長さ3.0mm、

幅2.9mm。

(16)オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化種子 イネ科

側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面形状は楕円形～円形となる(Jacomet, 2006)。長さ6.6mm、幅3.2mm、厚さ2.4mm。

(17)イネ *Oryza sativa* L. 籾殻・炭化籾・炭化種子 イネ科

籾は黄褐色～淡褐色で、側面観は長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。長さ7.0mm、幅3.3mm。種子は上面観が両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の2本の浅い溝があり、中央がやや盛り上がる。長さ4.7mm、幅2.8mm。

(18)ホタルイ属 *Scirpus* spp. 果実 カヤツリグサ科

黒色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は短倒卵形。頂部は尖り、基部は狭まって着点がある。壁は硬く、光沢がある。長さ2.1mm、幅1.8mm。

4. 考察

17世紀後半から19世紀中葉の6基の土坑から産出した大型植物遺体を同定した結果、栽培植物が種類および産出数ともに非常に多かった。栽培植物は、木本植物ではウメとモモ、ウルシの3種類、草本植物ではトウガンとカボチャ、メロン仲間、ヒョウタン仲間、オオムギ、イネが産出した。ウルシ以外は食用に利用した残渣と考えられる。ただし、ヒョウタン仲間は容器に利用した可能性もある。ウルシは18世紀中葉の土坑26と19世紀初頭の土坑3、時期不明の土坑80から産出し、特に土坑3では1000点以上産出した。内果皮がすべて炭化していたため、中果皮に含まれる蠟を採取後に土坑内に廃棄された可能性がある。トウガンは単体出土の種子だけでも破片を含めて2500点以上産出したが、17世紀中葉から後葉の土坑84では、低地遺跡でも通常残存しない黄白色の果肉ごと残存しており、内部に種子が残存した状態で約1/2個体が産出した。メロン仲間も時期不明の土坑80で約250点と多産したが、種子の大きさからほとんどが栽培種のマクワウリ・シロウリ型に分類され、一部モルディカメロン型が含まれる可能性がある。

18世紀中葉の土坑26から見いだされたカキノキ属には栽培種と野生種があり、出土した種子は栽培種の大きさに近いが、破片が多く、断定できなかった。また野生植物であるが食用可能な種実としてヤマモモとクリ、コナラ属、サンショウ、ヒシ属が見いだされた。クリやコナラ属、ヒシ属はほとんど破片で、利用後の残渣の可能性が高い。

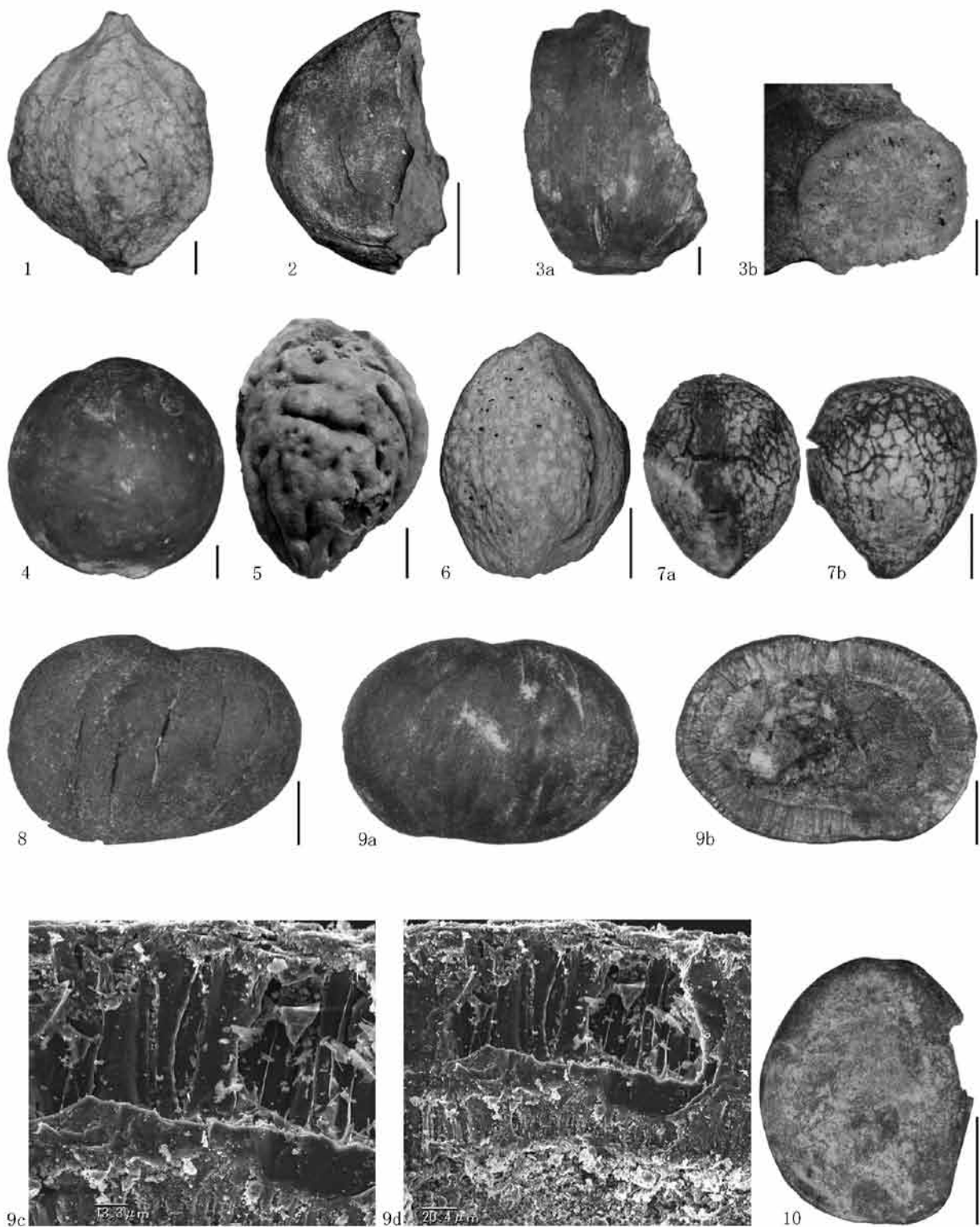
土坑の周辺から自然の営力で土坑内に堆積したと考えられる種実としては、クスノキとナス属、ホタルイ属がある。このうち、ホタルイ属は抽水植物であるため、土坑26や土坑80では土坑内もしくは周辺に水が溜まる環境があった可能性がある。しかし、これらの種実の産出数はわずかで、土坑内に偶発的に入ったと考えられる。

以上のことから、土坑内に堆積した植物では当時食用された植物や利用された植物の種実が主体となって堆積していたと考えられる。

引用文献

藤下典之(1984)出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法. 渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学—総括報告書」: 638-654, 同朋舎出版。

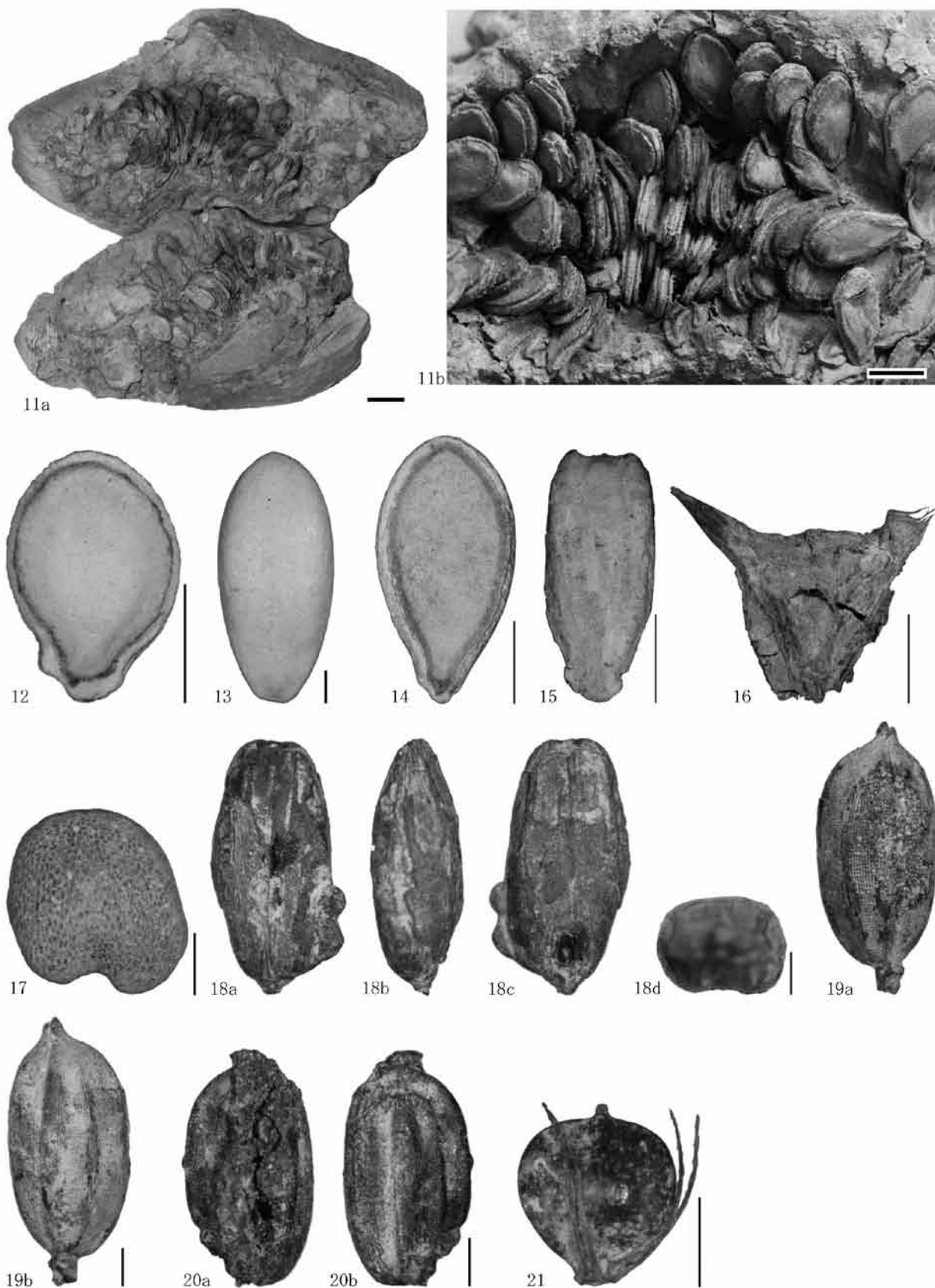
Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab. (2006) Identification of cereal remains from archaeological sites. 2nd edition, IPAS, Basel Univ.



スケール 1, 3, 4, 7-9b:1mm, 2, 5, 6, 10:5mm

写真6 矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体(1)

1. ヤマモモ核 (土坑 12、No. 2)、2. クリ果実 (土坑 3、No. 4)、3. コナラ属果実 (土坑 26、No. 3)、4. クスノキ核 (土坑 3、No. 1)、5. モモ核 (土坑 7、No. 5)、6. ウメ核 (土坑 3、No. 1)、7. サンショウ炭化種子 (土坑 12、No. 2)、8. ウルシ炭化内果皮 (土坑 3、No. 1)、9a-b. ウルシ炭化内果皮 (土坑 3、No. 1)、9c-d. ウルシ炭化内果皮断面走査電子顕微鏡写真 (土坑 3、No. 1)、10. カキノキ属炭化種子 (土坑 26、No. 3)



スケール 11a:10mm, 11b:5mm, 12, 14-16:5mm, 13, 17-21:1mm

写真7 矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体(2)

11a. トウガン果実・種子(土坑84、No.6)、11b. 11aの拡大(土坑84、No.6)、12. トウガン種子(土坑3、No.1)、13. メロン仲間種子(土坑3、No.1)、14. カボチャ種子(土坑3、No.1)、15. ヒョウタン仲間種子(土坑12、No.2)、16. ヒシ属果実(土坑3、No.1)、17. ナス属種子(土坑3、No.1)、18. オオムギ炭化種子(土坑3、No.1)、19. イネ炭化籾(土坑3、No.1)、20. イネ炭化種子(土坑3、No.1)、21. ホタルイ属果実(土坑26、No.3)

矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体の同定

中村賢太郎(パレオ・ラボ)

1. はじめに

福岡県柳川市矢加部に所在する矢加部町屋敷遺跡は、有明海沿岸に立地し、久留米柳川往還に面した町屋遺跡である。矢加部町屋敷遺跡の発掘調査では、17～20世紀に属する遺構から魚骨、獣骨、貝が良好な保存状態で出土した。ここでは矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体の同定結果を報告する。なお、現生標本の閲覧にあたっては、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生と早稲田大学の樋泉岳二先生にご協力をいただいた。

2. 試料と方法

試料は、福岡県教育委員会が発掘調査現場での目視あるいは水洗により採取した動物遺体である。試料の多い土坑3などは、堆積物が2mm目の篩で水洗され、試料が回収されている。

試料が採取された遺構は、1次地点の大溝2、土坑3、土坑19、2次地点の溝2、4次地点の埋甕2、茶褐色土落ち込み、大土坑2、大土坑5、土坑64、ピット83、土坑84、土坑88、土坑90、5次地点の大土坑1、ピット24である。各遺構の時期は、古い方から4次地点の土坑84が17世紀中葉～後葉、同土坑64が17世紀末～18世紀初頭、同大土坑5が18世紀初頭以前、同土坑90が18世紀初頭、同埋甕2と1次地点の土坑19が18世紀初頭～前葉、1次地点の大溝2が18世紀前葉～19世紀中葉、5次地点の大土坑1が18世紀前葉～中葉、4次地点の土坑88が18世紀中葉～後葉、1次地点の土坑3が19世紀初頭、4次地点の大土坑2が19世紀中葉、2次地点の溝2が19世紀後葉～20世紀前葉、4次地点の茶褐色土落ち込みと同ピット3および5次地点のピット24は時期不明である。

同定は肉眼で現生標本との比較により行った。試料は九州歴史資料館に保管されている。

3. 結果

同定された動物遺体の一覧を表1に、個々の動物遺体の同定結果と観察所見は表2、3に示す。

(1) 貝類

貝類では、オオタニシ、ツメタガイ、アカニシ、バイ、オニニシ、フネガイ科(ミミエガイ類)、サルボウ、マガキ、ドブガイ属、アゲマキ、シジミ属、アサリが同定された。

貝類の多くは1次地点の大溝2北部から出土しており、大溝2北部の中層でフネガイ科、ドブガイ属、シジミ属、アサリ、上層でアカニシ、バイ、オニニシ、サルボウ、層不明ではマガキ、アゲマキが見られた。その他の遺構では、1次地点の土坑19でオオタニシ、2次地点の溝2でツメタガイが見られた。

(2) 魚類

魚類では、サメ類、真骨類、ヒラ、スズキ属、シイラ、タイ科、マダイ、ボラ科、マグロ属、ヒラメ科が同定された。

1次地点の大溝2で、スズキ属左主鰓蓋骨、真骨類左鰓条骨が見られた。同土坑3で、ヒラ右主上顎骨、シイラ腹椎、タイ科犬歯、同左方骨、同左主鰓蓋骨、同腹椎、同鱗、ヒラメ科右前上顎骨、真骨類の各部位が見られた。

4次地点の埋甕2でマグロ属腹椎、同大土坑5でスズキ属右角骨、同ピット83でマダイ前頭骨、同土坑84でサメ類椎骨が見られた。

5次地点の大土坑1で、ボラ科左主鰓蓋骨、マグロ属尾椎、真骨類右鰓条骨が見られた。

(3) 爬虫類

爬虫類では、イシガメ科とスッポンが同定された。

1次地点の大溝2でイシガメ科腹甲が見られた。同土坑3および4次地点の土坑64、同土坑90でスッポン腹甲、5次地点の大土坑でスッポン背甲が見られた。

(4) 哺乳類

哺乳類では、哺乳綱、ウマが同定された。その他にウシの可能性のある大型哺乳類骨が見られた。

1次地点の大溝2で、ウシ?の左脛骨と長骨骨端破片、哺乳綱の各部位が見られた。

4次地点の大土坑2でウマ左基節骨、同土坑64でウマ左肩甲骨、同土坑88でウマ右中足骨が見られた。

5次地点のピット24でウマの上顎切歯5本が見られた。5本の歯種は左第1切歯、左第3切歯、右第1～3切歯である。

(5) 鳥類

鳥類では、鳥綱、ニワトリ、アビ属が同定された。

1次地点の大溝2で、ニワトリの胸骨と右足根中足骨、アビ属左足根中足骨、鳥綱右足根中足骨が見られた。

4次地点の茶褐色土落ち込みでニワトリの右足根中足骨、同大土坑5でニワトリの左上腕骨、同土坑88で鳥綱の右肩甲骨が見られた。

4. 考察

貝類では、淡水域に生息するオオタニシやドブガイ属、淡水域あるいは汽水域に生息するシジミ属、海の内湾に生息するツメタガイ、アカニシ、フネガイ科(ミミエガイ類)、サルボウ、マガキ、アゲマキ、アサリ、湾外に生息するバイ、オニニシなどが見られた。河川や湖沼から有明海にかけ

表66 矢加部町屋敷遺跡出土動物遺体種名表

軟体動物門	Mollusca
腹足綱	Gastropoda
原始紐舌目	Architaenioglossa
タニシ科	Viviparidae
タニシ属	<i>Cipangopaludina</i>
オオタニシ	<i>Cipangopaludina japonica</i>
盤足目	Discopoda
タマガイ科	Naticidae
ツメタガイ属	Glossaulax
ツメタガイ	<i>Glossaulax didyma</i>
新腹足目	Neogastropoda
アケキガイ科	Muricidae
Rapana属	<i>Rapana</i>
アカニシ	<i>Rapana venosa</i>
エゾバイ科	Buccinidae
バイ属	<i>Babylonia</i>
バイ	<i>Babylonia japonica</i>
テングニシ属	<i>Hemifusus</i>
オニニシ	<i>Hemifusus crassicaudus</i>
二枚貝綱	Bivalvia
フネガイ目	Arcoida
フネガイ科	Arcidae
フネガイ科の一種	Arcidae gen. et sp. Indet.
サルボウ属	<i>Scapharca</i>
サルボウ	<i>Scapharca subcrenata</i>
ウグイスガイ目	Pterioidea
イタボガキ科	Ostreidae
マガキ属	<i>Crassostrea</i>
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
イシガイ目	Mytiloidea
イシガイ科	Unionidae
ドブガイ属	<i>Anodonta</i>
ドブガイ属の一種	<i>Anodonta</i> sp.
マルスダレガイ目	Veneroidea
ナタマメガイ科	Pharellidae
アゲマキ属	<i>Sinonovacula</i>
アゲマキ	<i>Sinonovacula constricta</i>
シジミ科	Corbiculidae
シジミ属	<i>Corbicula</i>
シジミ属の一種	<i>Corbicula</i> sp.
マルスダレガイ科	Veneridae
アサリ属	<i>Ruditapes</i>
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
脊索動物門	Chordata
軟骨魚綱	Chondrichthyes
サメ類	Selachii
サメ類の一種	Selachii ord., fam., gen. et sp. Indet.
条鰭魚綱	Actinopterygii
真骨類	Teleostei
真骨類の一種	Teleostei ord., fam., gen. et sp. Indet.
ニシン目	Clupeiformes
ニシン科	Clupeidae
ヒラ属	<i>Llisha</i>
ヒラ	<i>Llisha elongata</i>
スズキ目	Perciformes
スズキ科	Percichthyidae
スズキ属	<i>Lateolabrax</i>
スズキ属の一種	<i>Lateolabrax</i> sp.
シイラ科	Coryphaenidae
シイラ属	<i>Coryphaena</i>
シイラ	<i>Coryphaena hippurus</i>
タイ科	Sparidae
タイ科の一種	Sparidae gen. et sp. Indet.
マダイ属	<i>Pagrus</i>
マダイ	<i>Pagrus major</i>
ボラ科	Mugilidae
ボラ科の一種	Mugilidae gen. et sp. Indet.
サバ科	Scombridae
マグロ属	<i>Thunnus</i>
マグロ属の一種	<i>Thunnus</i> sp.
カレイ目	Pleuronectiformes
ヒラメ科	Paralichthyidae
ヒラメ科の一種	Paralichthyidae gen. et sp. Indet.
爬虫綱	Reptilia
カメ目	Testudines
イシガメ科	Geoemydidae
イシガメ科の一種	Geoemydidae gen. et sp. Indet.
スッポン科	Trionychidae
スッポン属	<i>Pelodiscus</i>
スッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i>
哺乳綱	Mammalia
哺乳綱の一種	ord., fam., gen. et sp. Indet.
鯨偶蹄目	Cetartiodactyla
ウシ科	Bovidae
ウシ属	<i>Bos</i>
ウシ?	<i>Bos taurus</i> ?
ウマ目	Perissodactyla
ウマ科	Equidae
ウマ属	<i>Equus</i>
ウマ	<i>Equus caballus</i>
鳥綱	Aves
キジ目	Galliformes
キジ科	Phasianidae
ヤケイ属	<i>Gallus</i>
ニワトリ	<i>Gallus gallus domesticus</i>
アビ目	Gaviiformes
アビ科	Gaviidae
アビ属	<i>Gavia</i>
アビ属の一種	<i>Gavia</i> sp.

表67 矢加部町屋敷遺跡出土の魚類、爬虫類、哺乳類、鳥類

番号	調査次・遺構	分類群	部位	部分・状態	左右	数量	備考
1	1次大溝2北部上層	スズキ属	主鰓蓋骨	ほぼ完形	左	1	
2	1次土坑3	タイ科	方骨	関節部	左	1	
3	1次土坑3	ヒラメ科	前上顎骨	中央部	右	1	
4	1次土坑3	真骨類	不明	破片	?	1	
5	1次土坑3	真骨類	擬鎖骨?	完形	?	1	
6	5次大土坑1南部上層	ボラ科	主鰓蓋骨	ほぼ完形	左	1	
7	4次大土坑5	スズキ属	角骨	ほぼ完形	右	1	
8	4次ピット83	マダイ	前頭骨	破片	—	1	
9	1次土坑3	真骨類	擬鎖骨	破片	?	1	
10	1次土坑3	真骨類	不明	破片	?	1	
11	1次土坑3	タイ科	主鰓蓋骨	関節部	左	1	
12	5次大土坑1南部上層	マグロ属	尾椎	椎体	—	1	
13	1次土坑3	シイラ	腹椎	ほぼ完形	—	1	
14	4次埋壙2	マグロ属	腹椎	椎体	—	1	
15	1次大溝2北部上層	ニワトリ	胸骨	破片	—	1	
16	1次土坑3	真骨類	間鰓蓋骨	完形	?	1	
17	1次土坑3	タイ科	腹椎	ほぼ完形	—	1	
18	4次土坑84	サメ類	椎骨	完形	—	1	
19	1次土坑3	ヒラ	主上顎骨	ほぼ完形	右	1	
20	4次土坑88	鳥綱	肩甲骨	関節部	右	1	
21	1次土坑3	タイ科	犬歯	先端欠損	?	1	
22	1次土坑3	タイ科	鱗	ほぼ完形	?	14	
23	1次土坑3	真骨類	鰭棘	ほぼ完形	—	1	
24	1次土坑3	真骨類	不明	破片	?	1	
25	5次大土坑1中層	マグロ属	尾椎	椎体	—	1	
26	1次大溝2北部上層	哺乳綱	頭蓋骨	破片	?	1	
27	1次大溝2北部上層	真骨類	鰓条骨	完形	左	1	大型
28	5次大土坑1	真骨類	鰓条骨	完形	右	2	大型, 切創
29	1次大溝2北部上層	アビ属	足根中足骨	完形	左	1	
30	1次大溝2北部上層	ニワトリ	足根中足骨	ほぼ完形	右	1	
31	4次茶褐色土落ち込み	ニワトリ	足根中足骨	ほぼ完形	右	1	
32	1次大溝2北部上層	鳥綱	足根中足骨	骨幹	右	1	
33a	5次ピット24	ウマ	上顎切歯	第1切歯	左	1	
33b	5次ピット24	ウマ	上顎切歯	第3切歯	左	1	
33c	5次ピット24	ウマ	上顎切歯	第1切歯	右	1	
33d	5次ピット24	ウマ	上顎切歯	第2切歯	右	1	
33e	5次ピット24	ウマ	上顎切歯	第3切歯	右	1	
34	1次大溝2北部	哺乳綱	不明	破片	?	1	大型獣
35	4次大土坑5	ニワトリ	上腕骨	完形	左	1	
36	4次大土坑2	ウマ	基節骨	前後不明	左	1	
37	1次大溝2北部	哺乳綱	寛骨	恥骨	右	1	大型獣
38a	1次大溝2北部	ウシ?	脛骨	骨幹	左	1	
38b	1次大溝2北部	ウシ?	長骨	骨端	?	1	
39	4次土坑88	ウマ	中足骨	近位端～骨幹	右	1	
40	4次土坑64	ウマ	肩甲骨	関節部	左	1	
41	4次土坑64	スッポン	腹甲	中腹骨板破片	右	1	
42	1次土坑3	スッポン	腹甲	下腹骨板破片	右	1	
43	4次土坑90	スッポン	腹甲	下腹骨板破片	左	1	
44	5次大土坑南部中層	スッポン	背甲	破片	—	1	
45	1次大溝2北部	イシガメ科	腹甲	破片	—	4	

での広い範囲で採取された貝類が持ち込まれ、食料として利用されたと考えられる。ただし、ドブガイ属とシジミ属は、1次地点の大溝2から出土しており、溝に自然に生息していた可能性も考えられる。

表68 矢加部町屋敷遺跡出土の貝類

番号	調査次・遺構	分類群	左右	数量	備 考
1a	1次大溝2北部	マガキ	左	1	1bと癒着
1b	1次大溝2北部	マガキ	右	1	1aと癒着
2	1次大溝2北部	アゲマキ	右	1	半欠
3	1次大溝2北部上層	オニニシ	—	1	ほぼ完形
4	1次大溝2北部上層	アカニシ	—	1	ほぼ完形
5	1次土坑19	オオタニシ	—	1	完形
6	1次大溝2北部上層	バイ	—	1	完形
7	2次溝2	ツメタガイ	—	1	完形
8	1次大溝2北部上層	サルボウ	右	1	完形
9	1次大溝2北部中層	フネガイ科	左	1	完形, 放射肋32条, 放射肋上に顆粒, ミミエガイ類
10	1次大溝2北部中層	ドブガイ属	右	1	完形, タガイorヌマガイ
11	1次大溝2北部中層	シジミ属	右	1	完形, マシジミorヤマトシジミ
12	1次大溝2北部中層	アサリ	左	1	完形

魚類では、汽水域から内湾に生息するヒラ、スズキ属、ボラ科、沿岸に生息するヒラメ科、沿岸～沖合のマダイなどタイ科、外洋を回遊するシイラ、マグロ属などが見られた。魚類も比較的広い範囲で採取されたものが持ち込まれ、食料として利用されたと考えられる。

爬虫類のうち、イシガメ科は、人により利用されていた可能性の他に、1次地点の大溝2に自然に生息していた可能性がある。スッポンは複数の土坑で見られ、食用にされていたと考えられる。

哺乳類では、ウシの可能性のある大型哺乳類とウマが見られ、これらは家畜として利用されたと考えられる。

鳥類では、ニワトリが家畜として利用されたと考えられる。また、野鳥としてはアビ属が見られた。アビ属は狩猟されたものが持ち込まれ、食料として利用されたと考えられる。

参考文献

金子浩昌(2001)食料残滓とその他の動物遺体. 江戸遺跡研究会編「図説江戸考古学研究事典」:393-401, 柏書房.
 松井章(2008)動物考古学. 312p, 京都大学学術出版会.
 西本豊弘・松井章編(1999)考古学と動物学. 210p, 同成社.

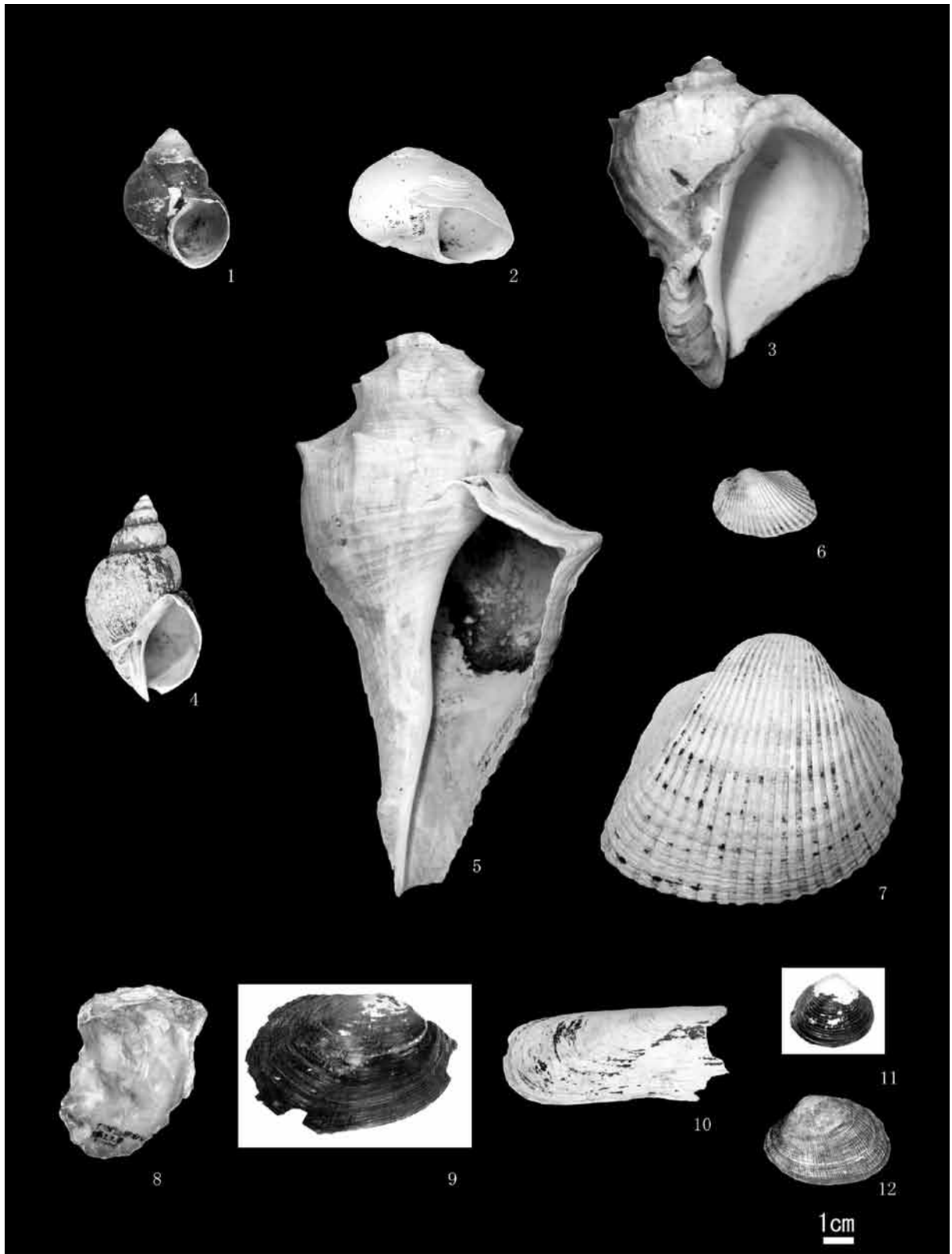


写真8 矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体(1)

1. オオタニシ (土坑 19、No. 5)、2. ツメタガイ (溝 2、No. 7)、3. アカニシ (溝 2、No. 4)、
4. パイ (溝 2、No. 6)、5. オニニシ (溝 2、No. 3)、6. フネガイ科 (溝 2、No. 9)、
7. サルボウ (溝 2、No. 8)、8. マガキ (溝 2、No. 1a)、9. ドブガイ属 (溝 2、No. 10)、
10. アゲマキ (溝 2、No. 2)、11. シジミ属 (溝 2、No. 11)、12. アサリ (溝 2、No. 12)

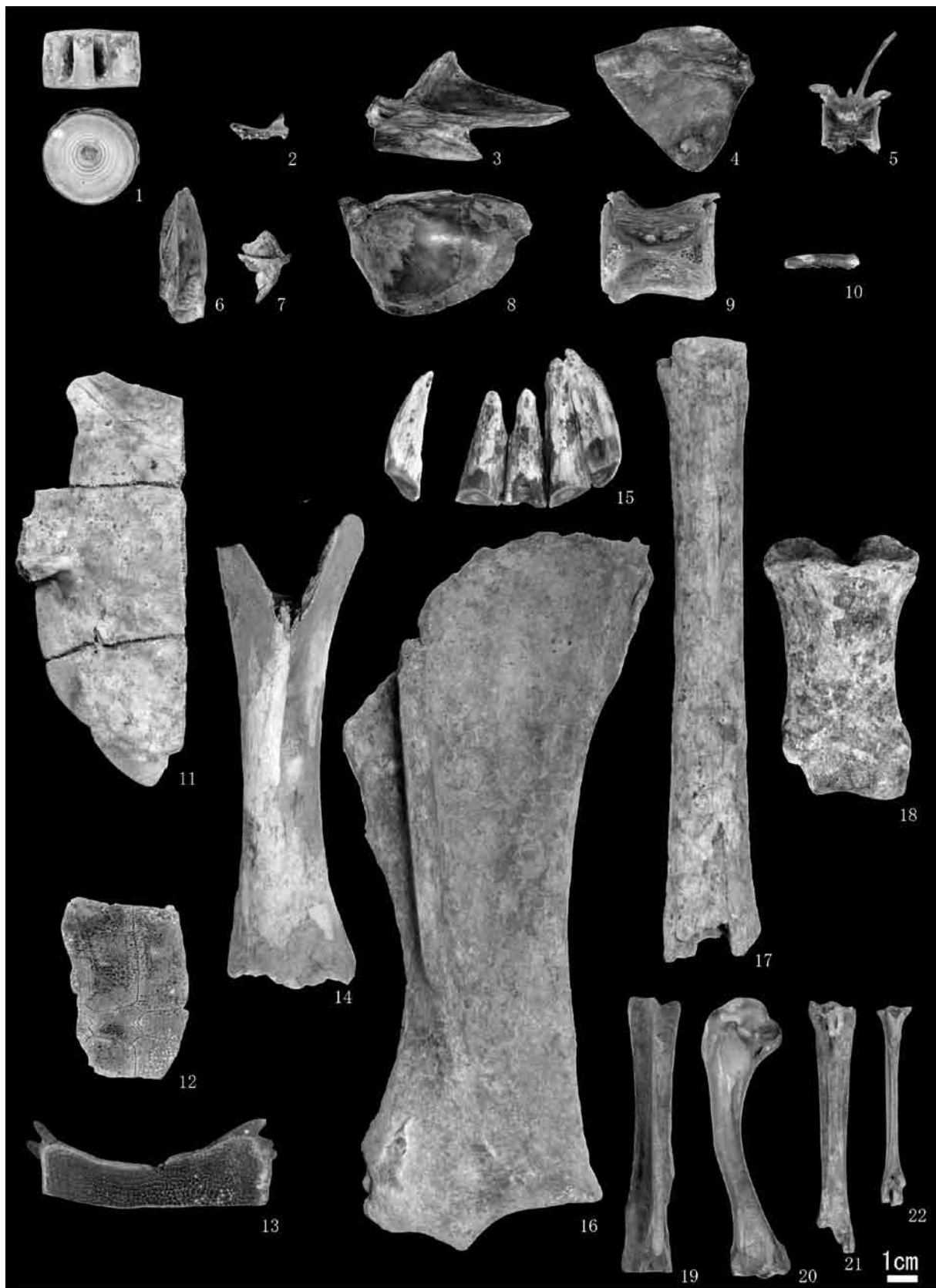
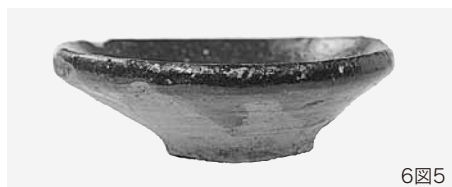


写真9 矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体(2)

1. サメ類椎骨(土坑84、No.18)、2. ヒラ主上顎骨R(土坑3、No.19)、3. スズキ属角骨R(大土坑5、No.7)、4. スズキ属主鰓蓋骨L(大溝2、No.1)、5. シイラ腹椎(土坑3、No.13)、6. マダイ前頭骨(ビット83、No.8)、7. タイ科主鰓蓋骨L(土坑3、No.11)、8. ボラ科主鰓蓋骨L(大土坑1、No.6)、9. マグロ属尾椎(大土坑1、No.25)、10. ヒラメ科前上顎骨R(土坑3、No.3)、11. イシガメ科腹甲(大溝2、No.45)、12. スッポン背甲(大土坑、No.44)、13. スッポン腹甲(土坑64、No.41)、14. ウシ?脛骨L(大溝2、No.38a)、15. ウマ上顎切歯(ビット24、No.33)、16. ウマ肩甲骨L(土坑64、No.40)、17. ウマ中足骨R(土坑88、No.39)、18. ウマ基節骨L(大土坑2、No.36)、19. ニワトリ胸骨(大溝2、No.15)、20. ニワトリ上脛骨L(大土坑5、No.35)、21. ニワトリ足根中足骨R(大溝2、No.30)、22. アビ属足根中足骨L(大溝2、No.29)



6図5



9図3



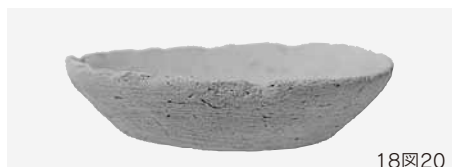
13図15



15図4



16図10



18図20



18図22



18図23



18図24



18図27



31図9



31図11



32図4



36図1



36図2



36図4



37図12



33図6-1・2



33図6-2上面



同上X線CT画像



37図2



37図7



37図15



37図27



37図28



38図7



38図10



38図19



38図20



39図5



39図9



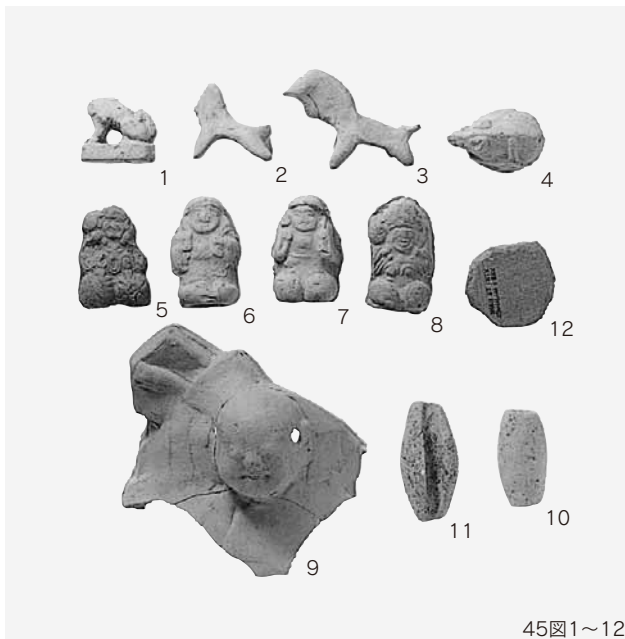
40図7



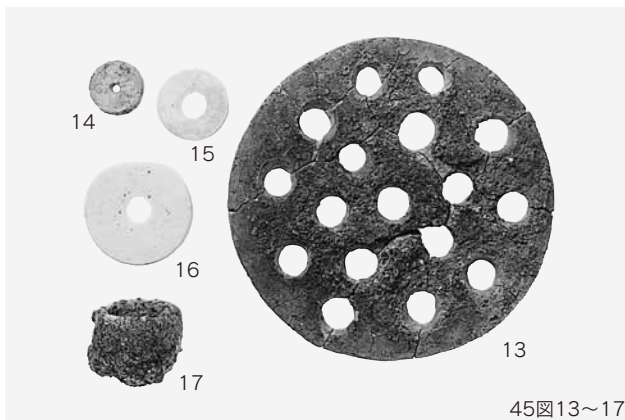
41図7



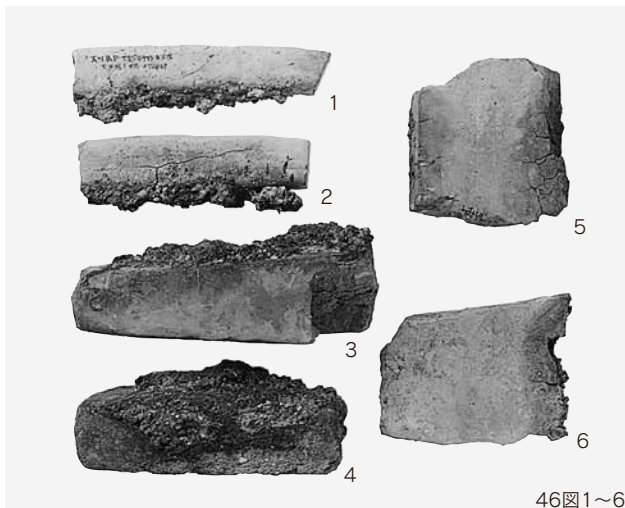
41図8



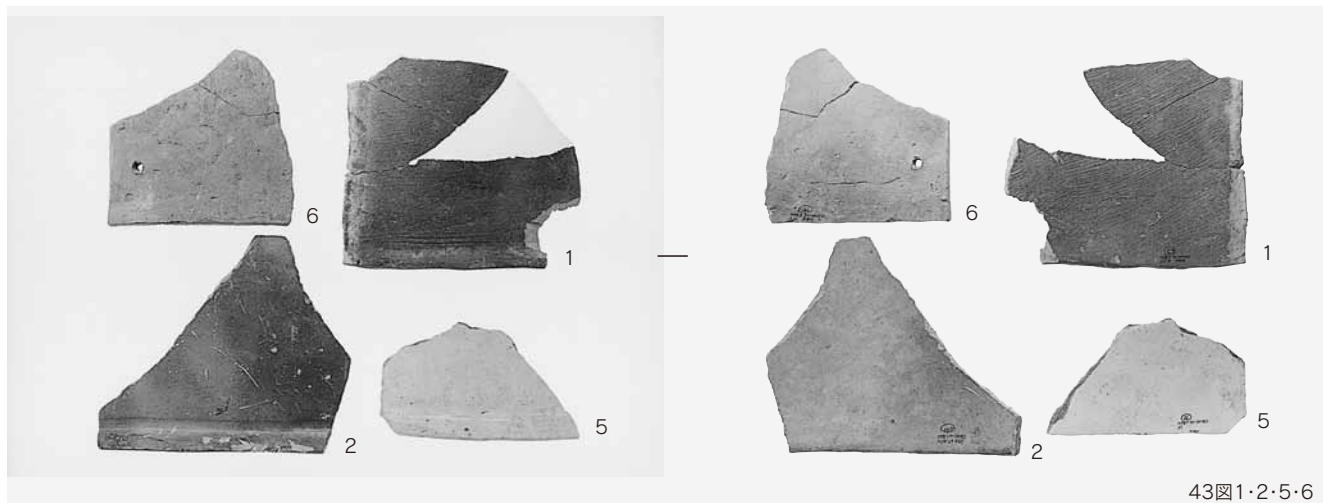
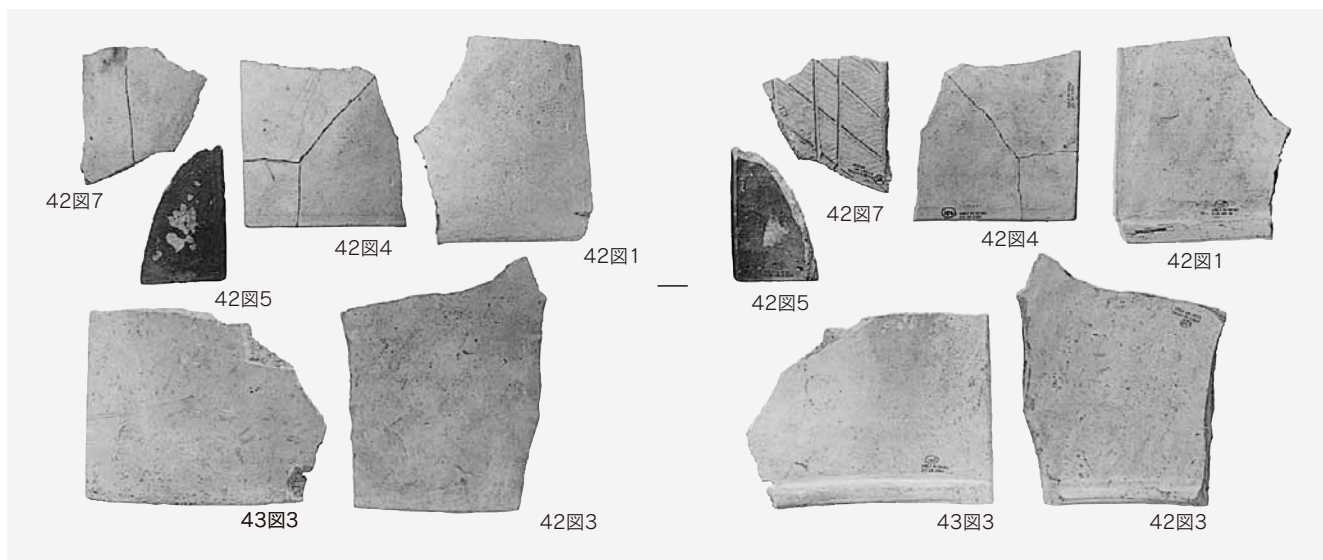
45図1~12



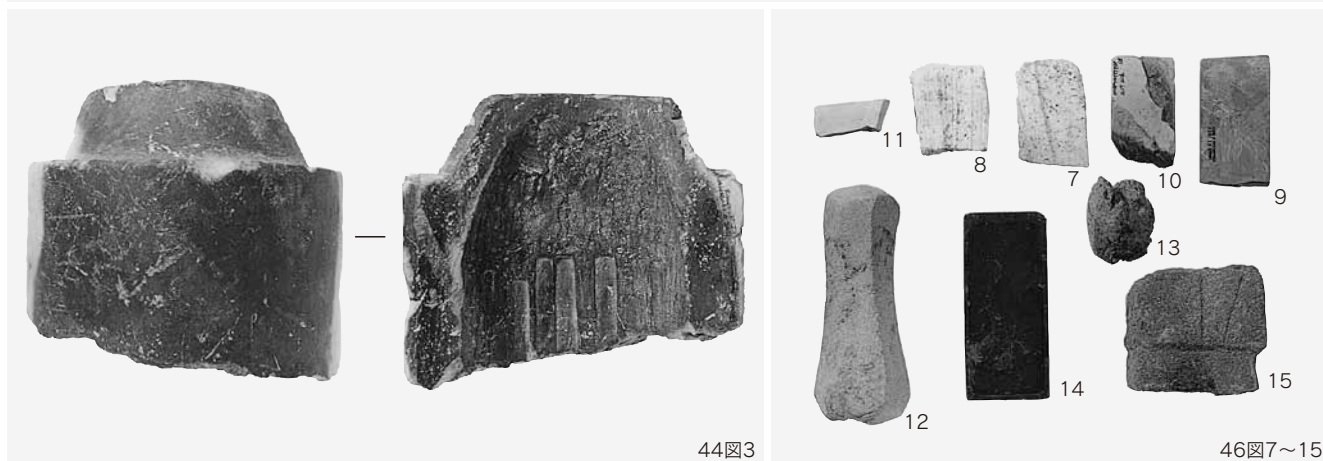
45図13~17



46図1~6

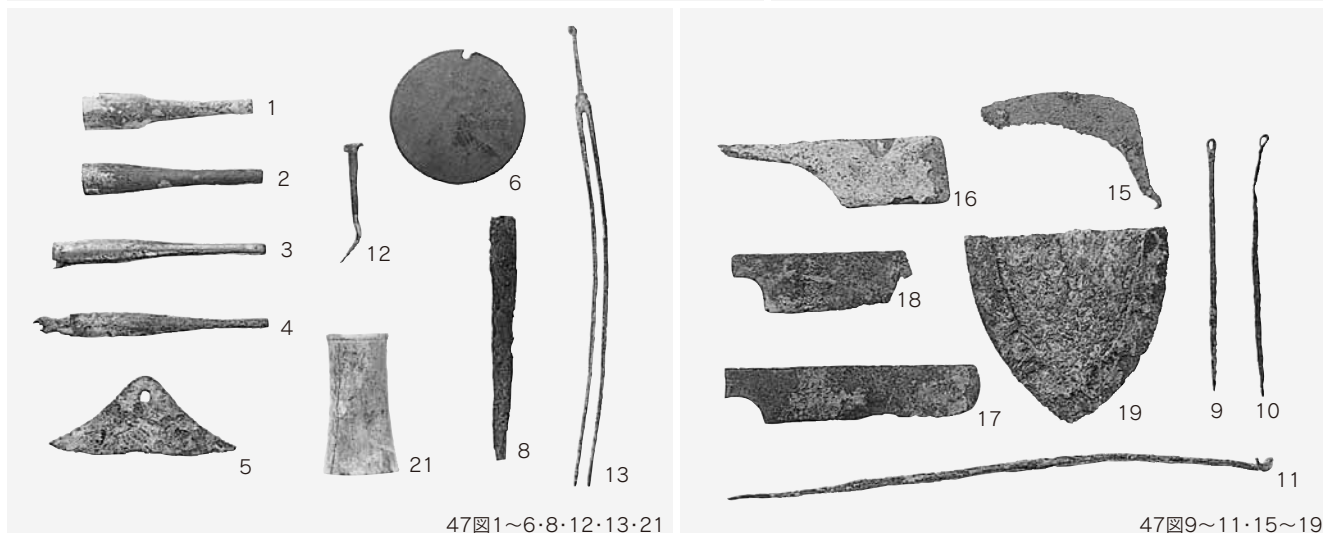


43図1・2・5・6



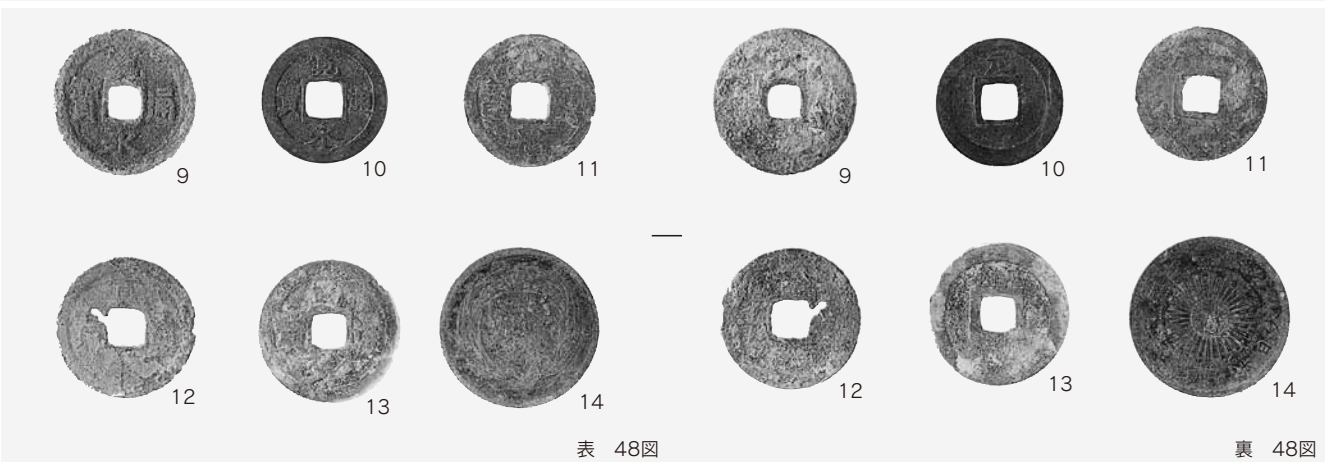
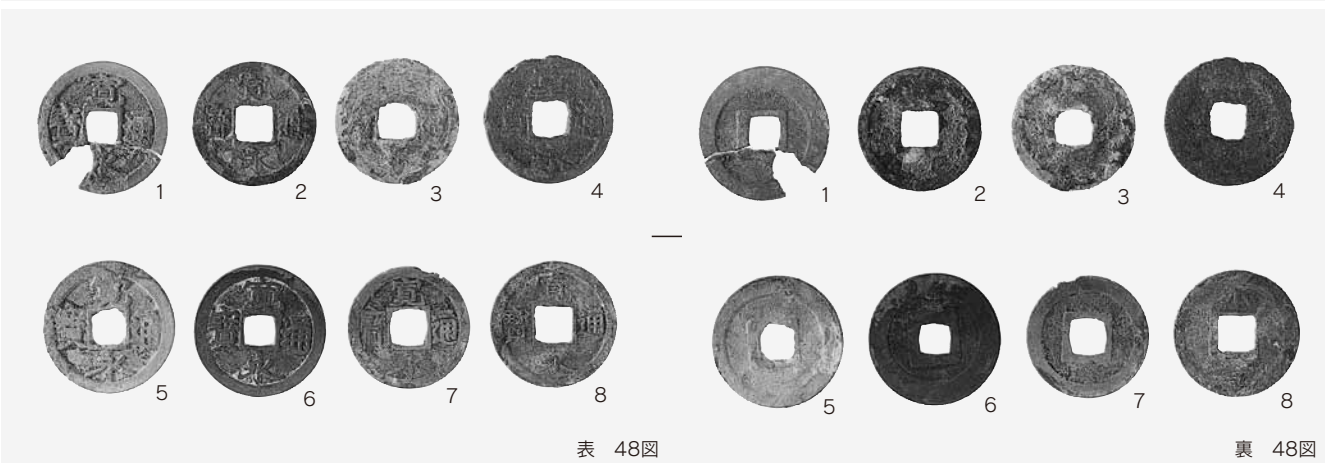
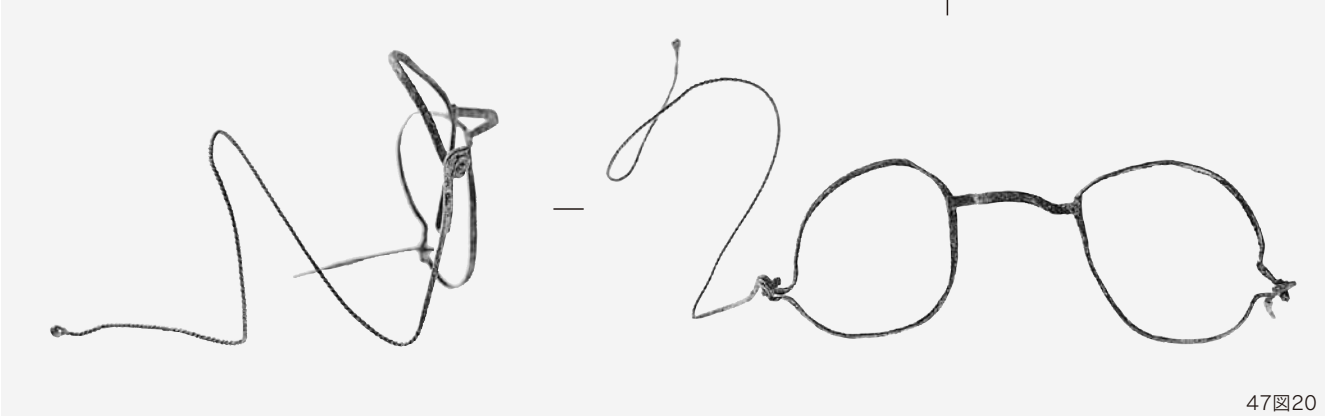
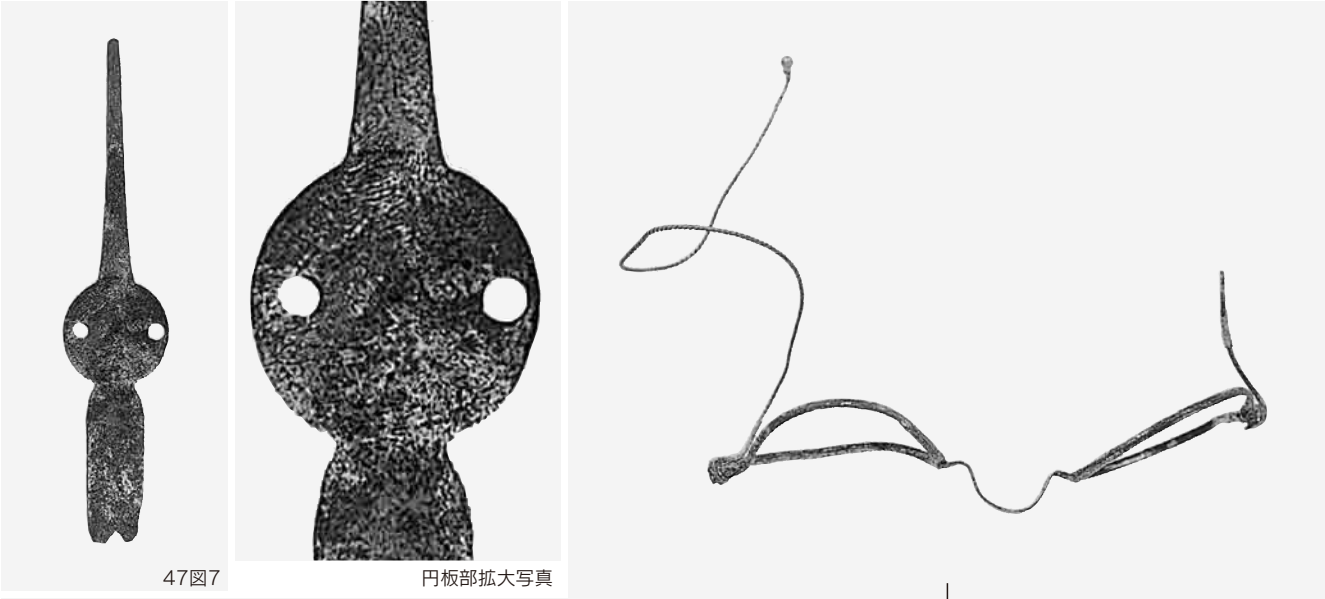
44図3

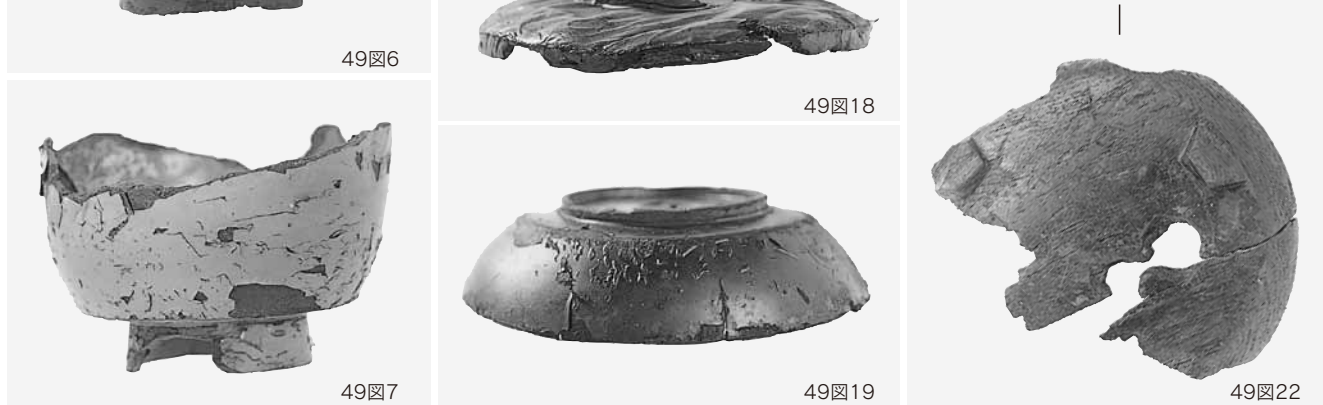
46図7~15



47図1~6・8・12・13・21

47図9~11・15~19







木簡1(52図1) 表



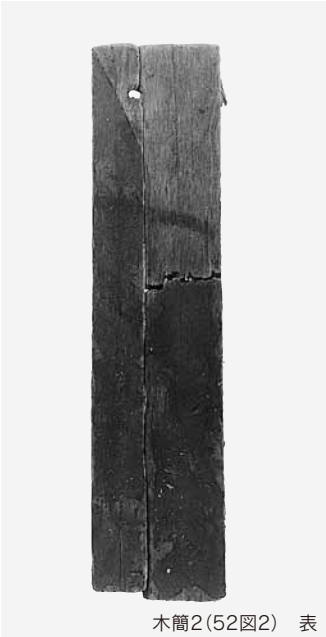
表 赤外線写真



木簡1(52図1) 裏



裏 赤外線写真



木簡2(52図2) 表



表 赤外線写真



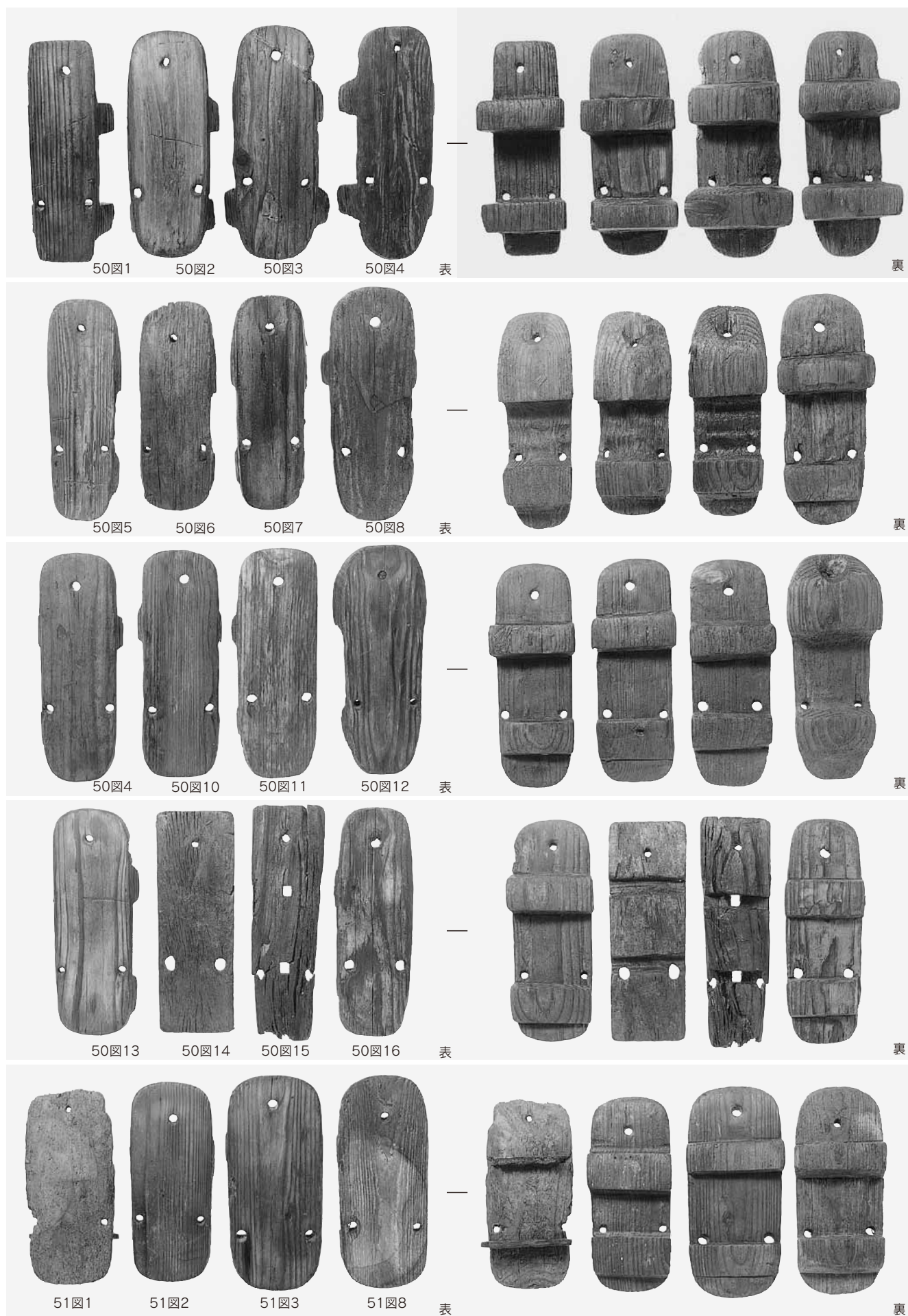
木簡2(52図2) 裏



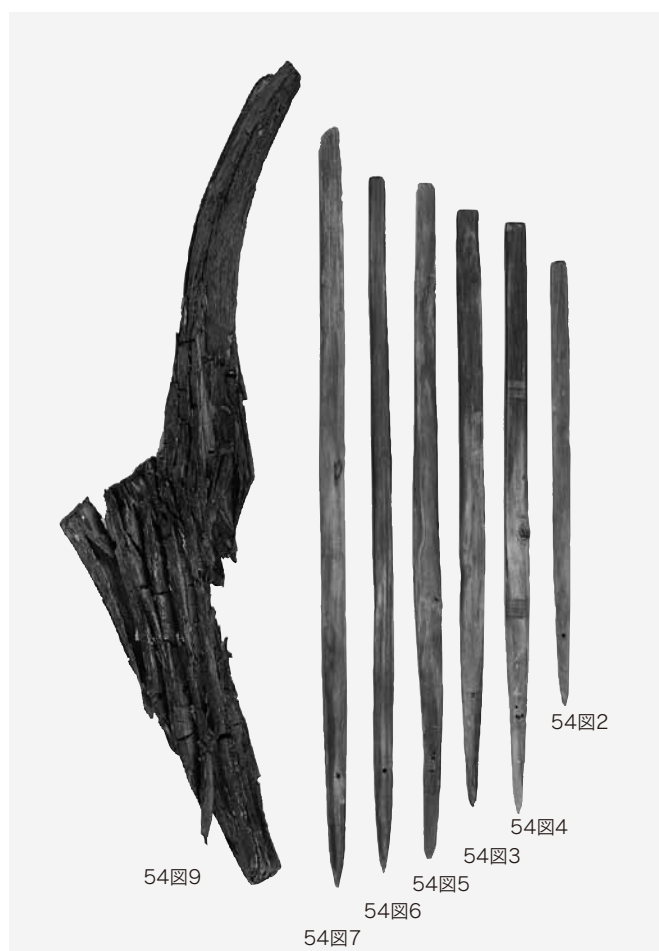
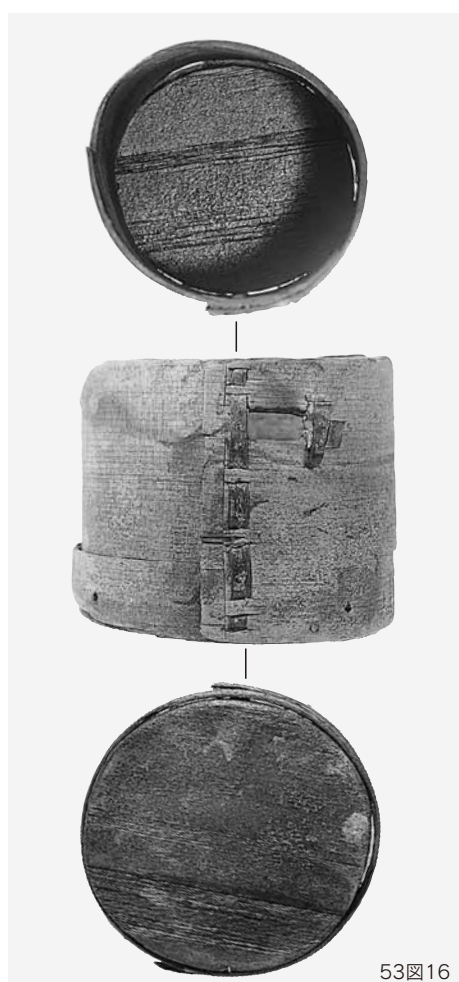
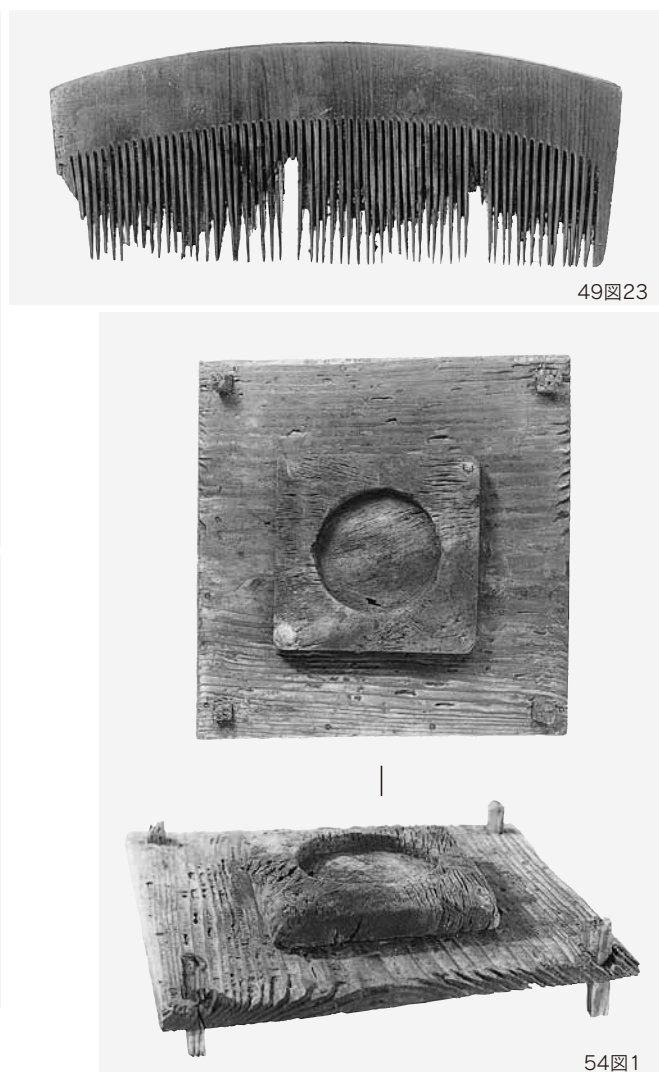
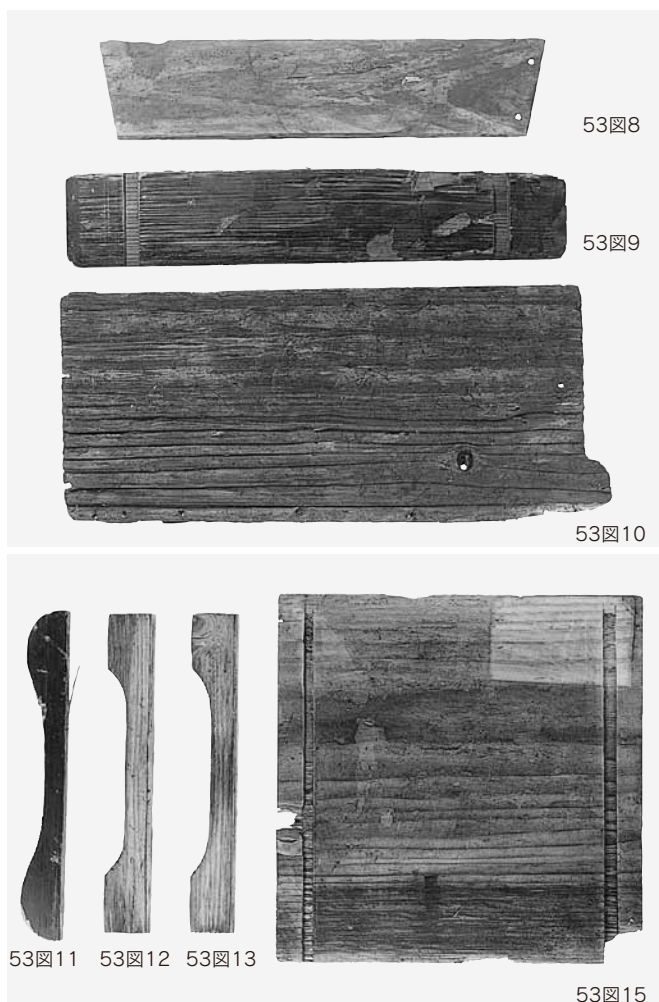
裏 赤外線写真

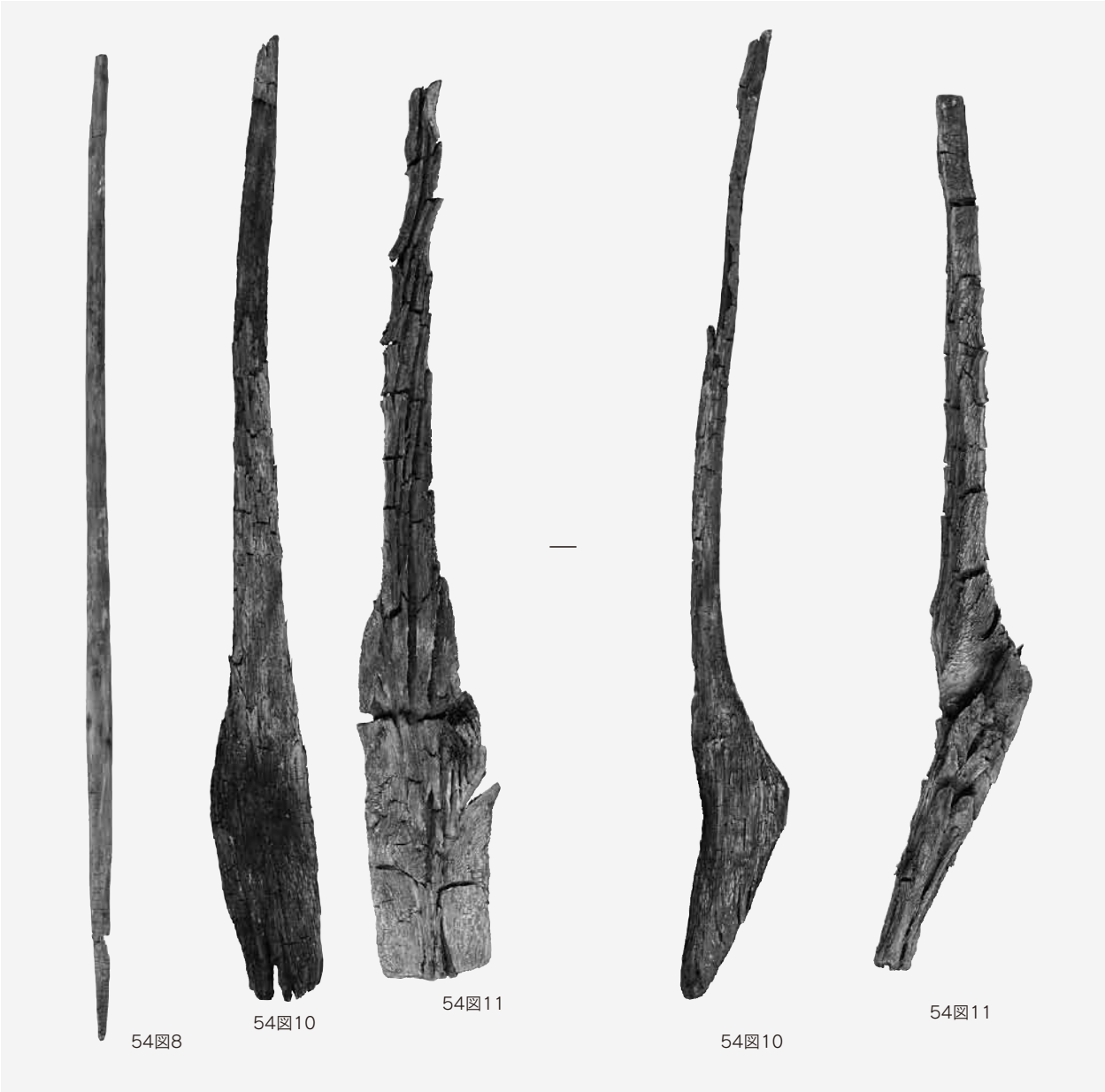


1 木簡3











1. 矢加部町屋敷遺跡遠景（西上空から）



2. 1次調査区全景（上空から）



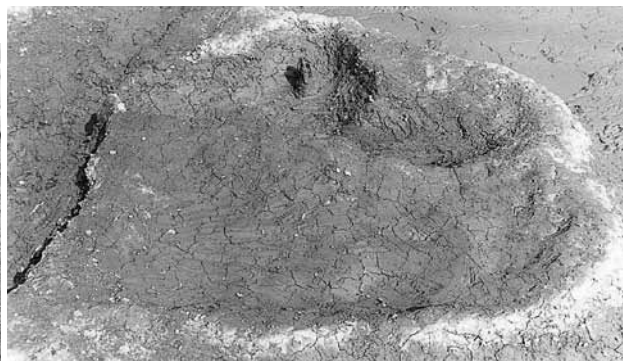
1. 1号土坑（北東から）



6. 7号土坑（南東から）



2. 3号土坑（南東から）



7. 8号土坑（西から）



3. 4・33号土坑（北から）



8. 9号土坑（北東から）



4. 4号土坑遺物出土状態（西から）



9. 11・22号土坑（北から）



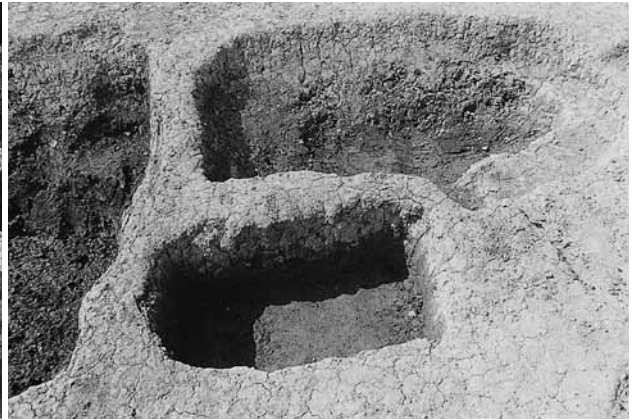
5. 6号土坑（東から）



10. 12号土坑（北東から）



1. 15・19・41号土坑（南から）



5. 23・25号土坑（南東から）



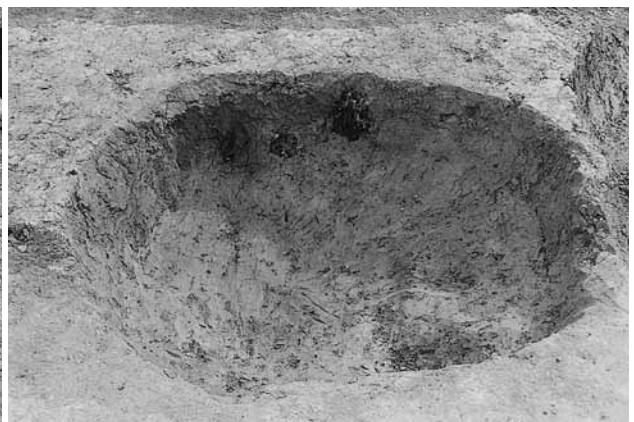
2. 16号土坑（南西から）



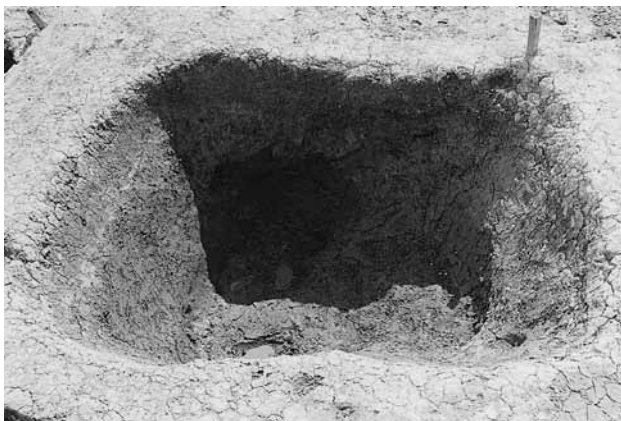
6. 23号土坑遺物出土状態（北西から）



3. 16・17号土坑（北東から）



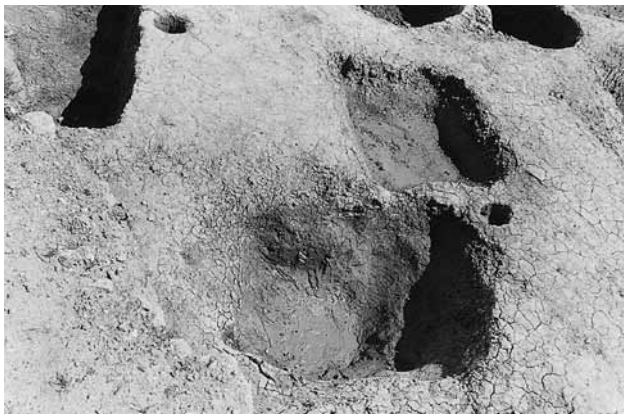
7. 27号土坑（北から）



4. 21号土坑（北東から）



8. 28・35号土坑・1号井戸（西から）



1. 30・39号土坑（北西から）



5. 41号土坑（南西から）



2. 31・36号土坑（西から）



6. 37号土坑（南西から）



3. 32号土坑（南西から）



7. 2号廃棄土坑（南西から）



4. 34号土坑（南から）



8. 1号大土坑（北西から）



1. 3号大土坑（北から）



3. 2号大溝排水管（南西から）



2. 4号大土坑（南から）

4. 同上
（西から）



5. 1・2号埋甕（南西から）



8. 5号埋甕（北東から）



6. 3号埋甕（南から）



9. 6号埋甕（西から）



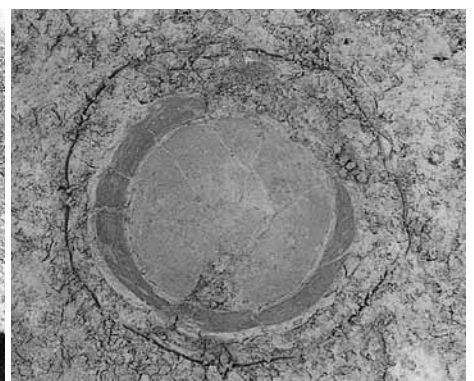
11. 8号埋甕（南から）



7. 4号埋甕（西から）



10. 7号埋甕（南から）



12. 9号埋甕（北から）



69図4



71図4



73図4



73図15



76図13・14



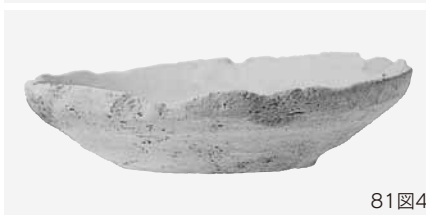
76図17



76図18



81図2



81図4



81図11



81図12



82図10



83図7



83図22



83図12



83図19



85図11



95図14



95図20



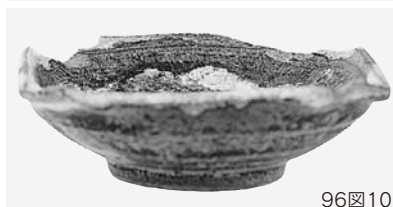
96図1



96図4



96図6



96図10



96図16



96図21



106図3



106図5



106図7



106図9



107図7



107図8



107図9



107図10



107図11



107図15



114図9



1



2



5



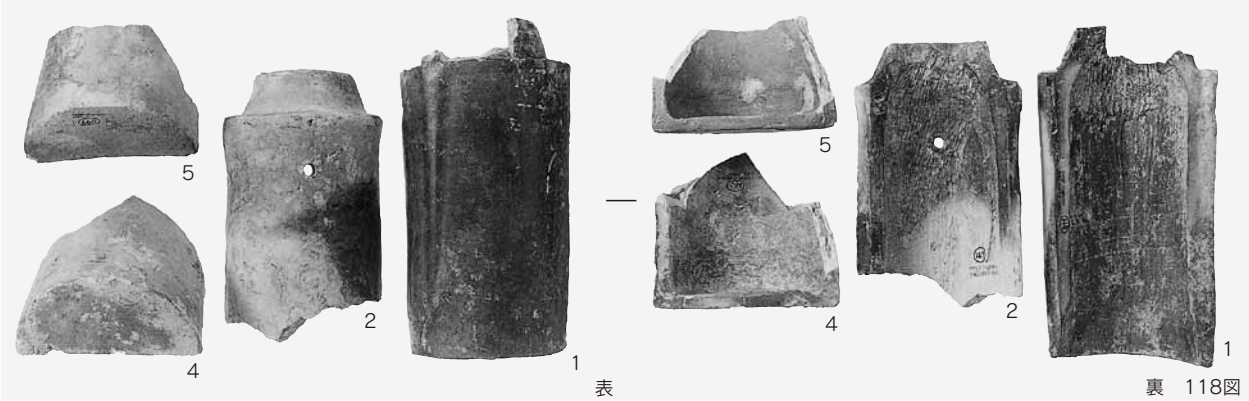
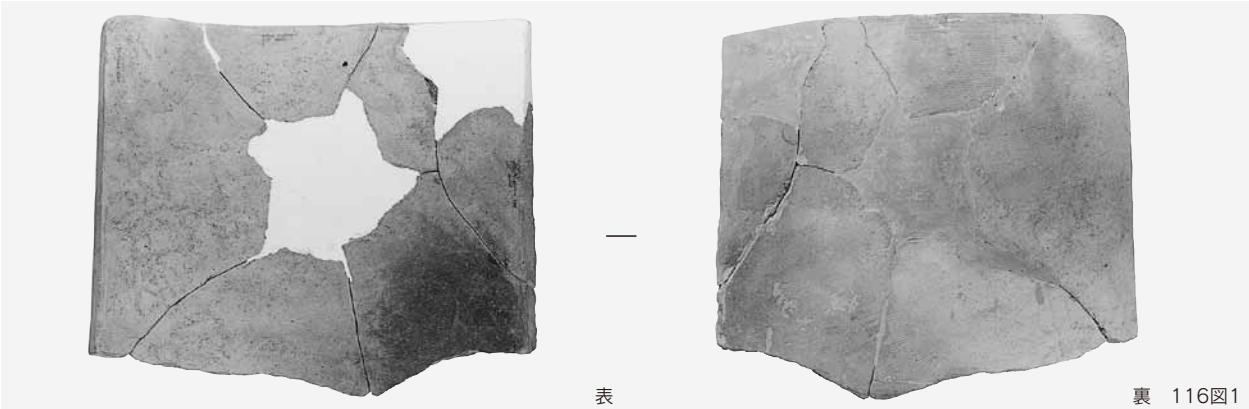
3

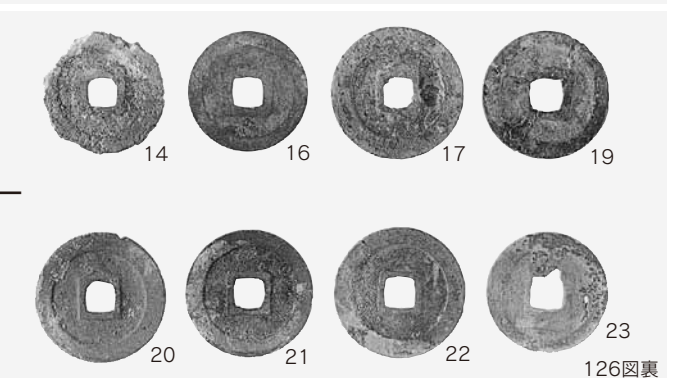
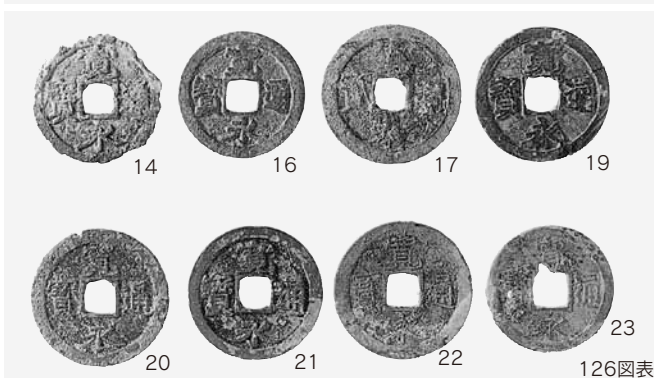
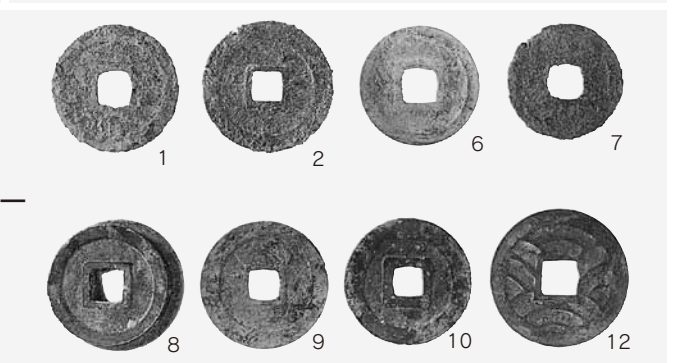
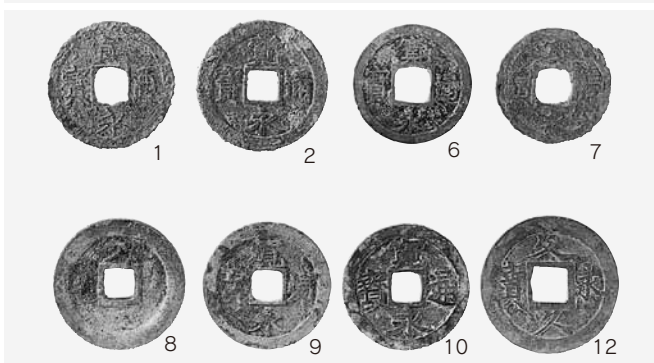
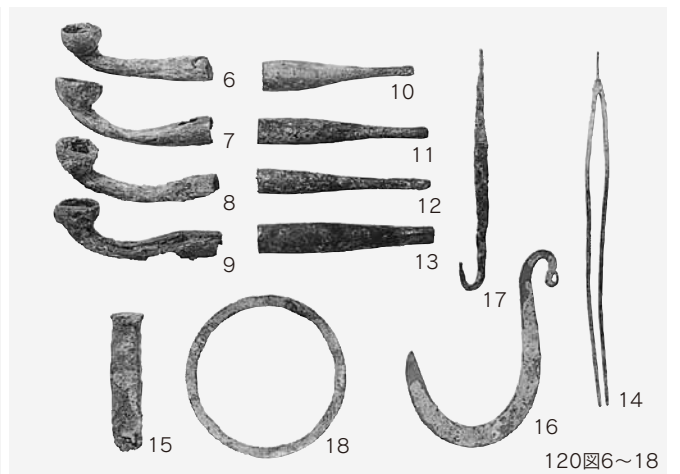
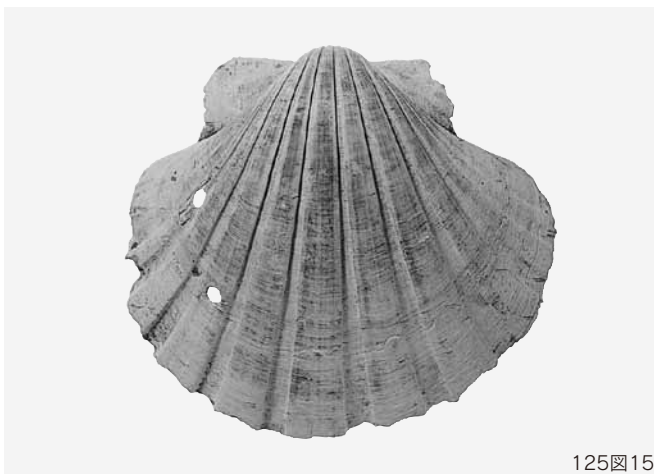
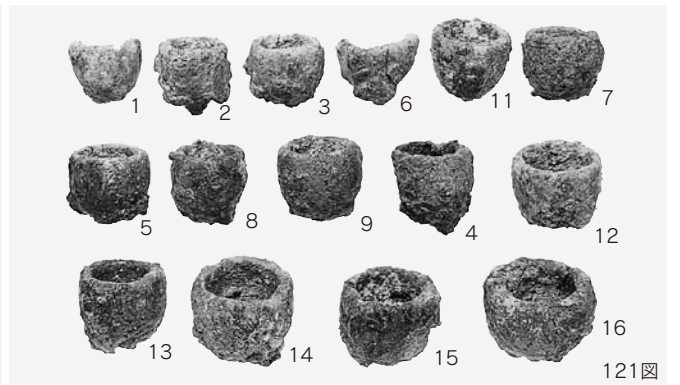
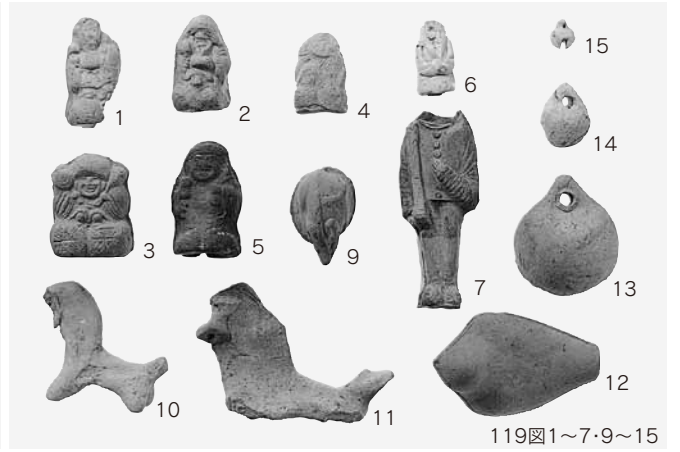
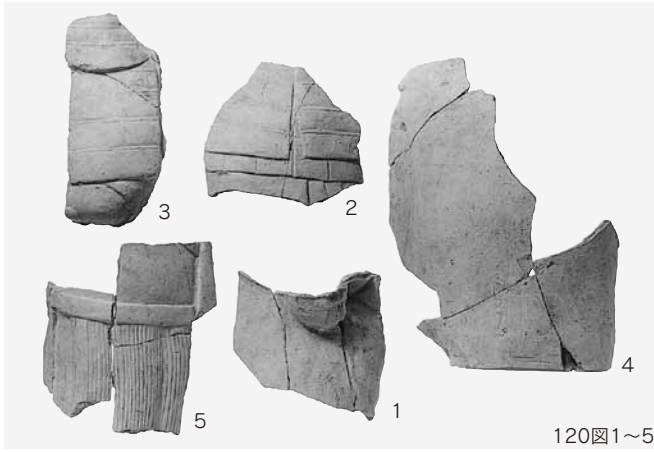


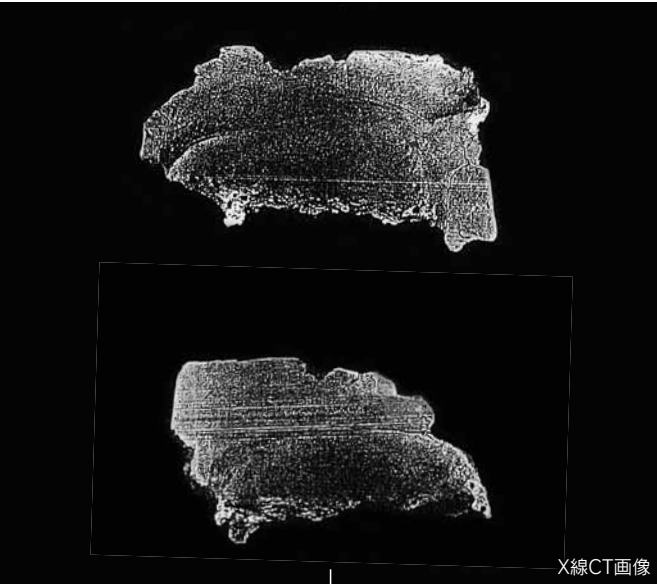
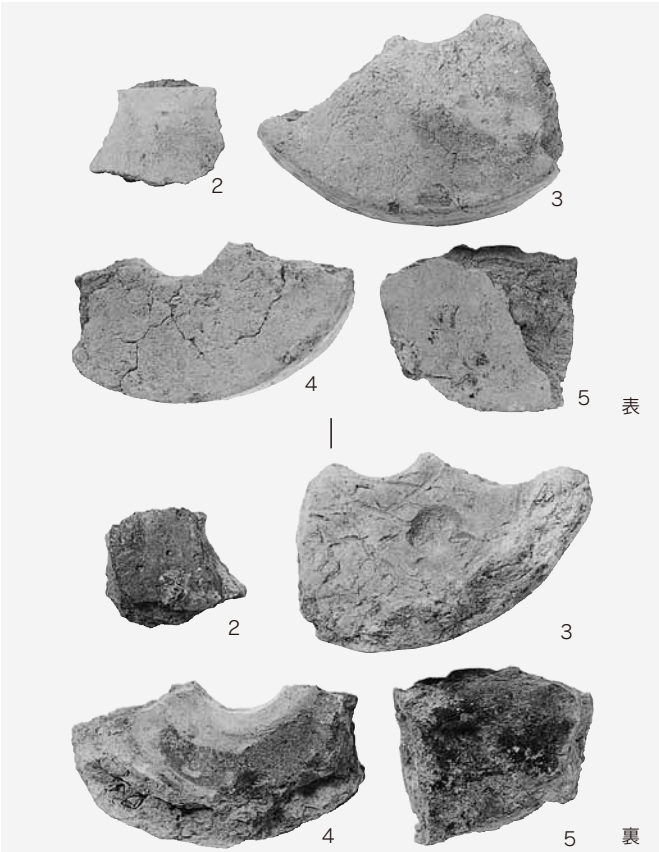
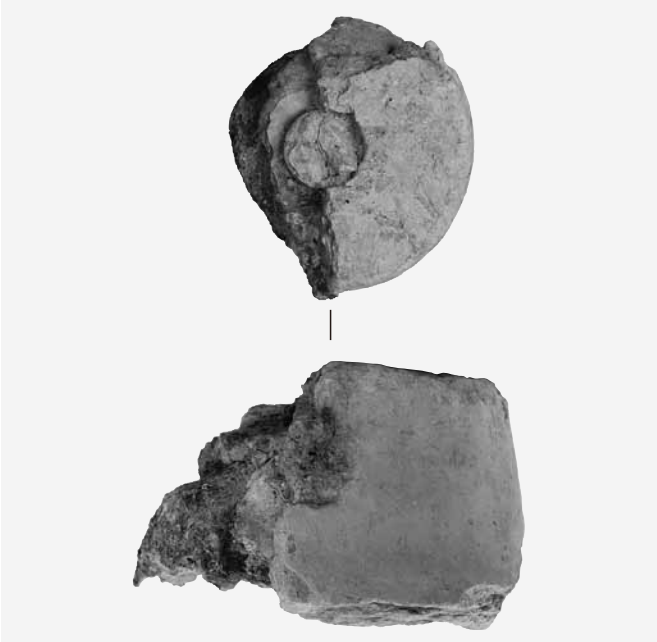
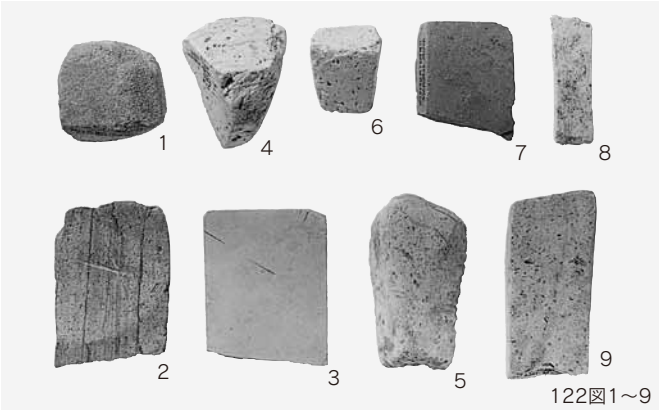
4

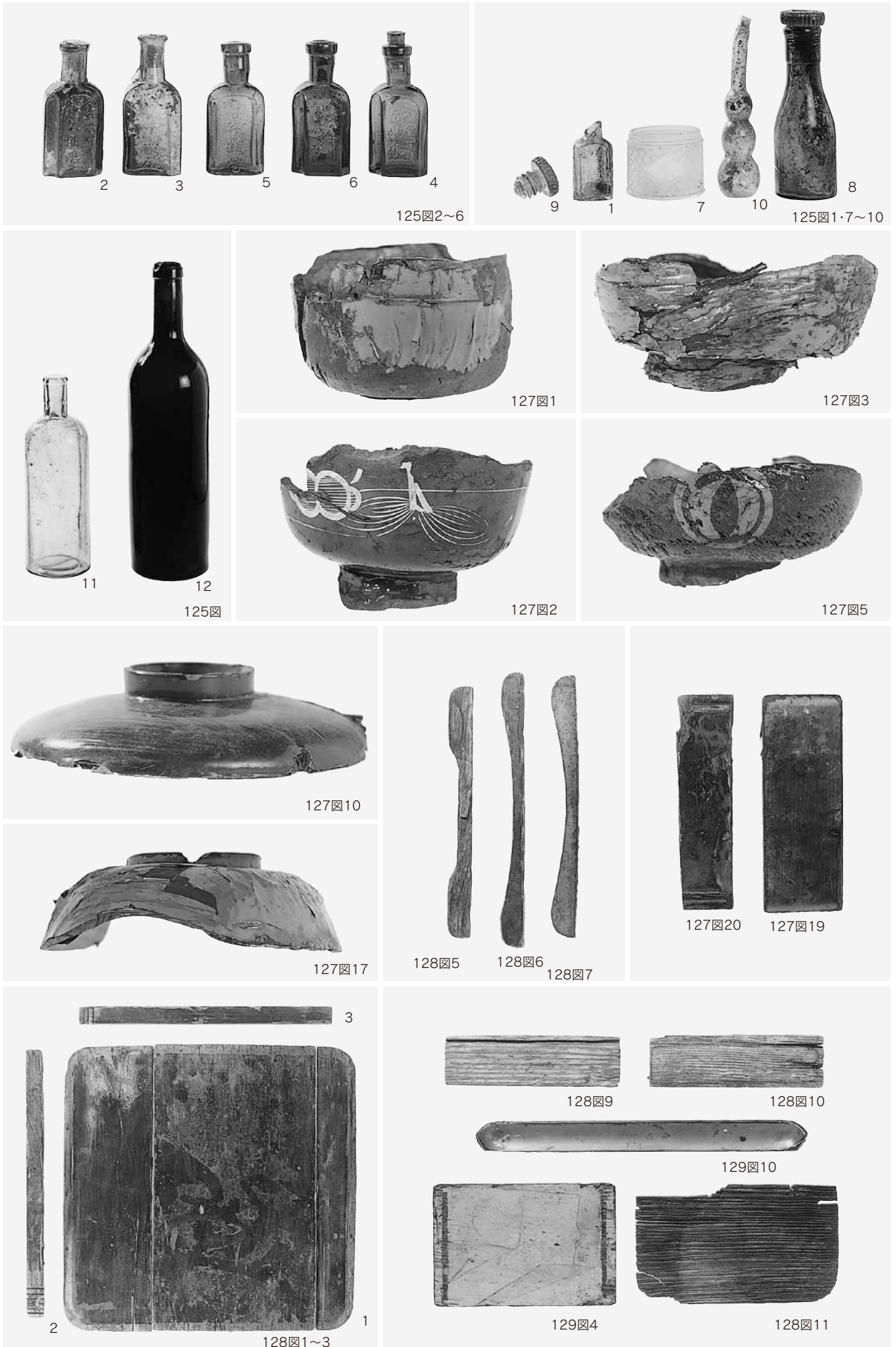


6

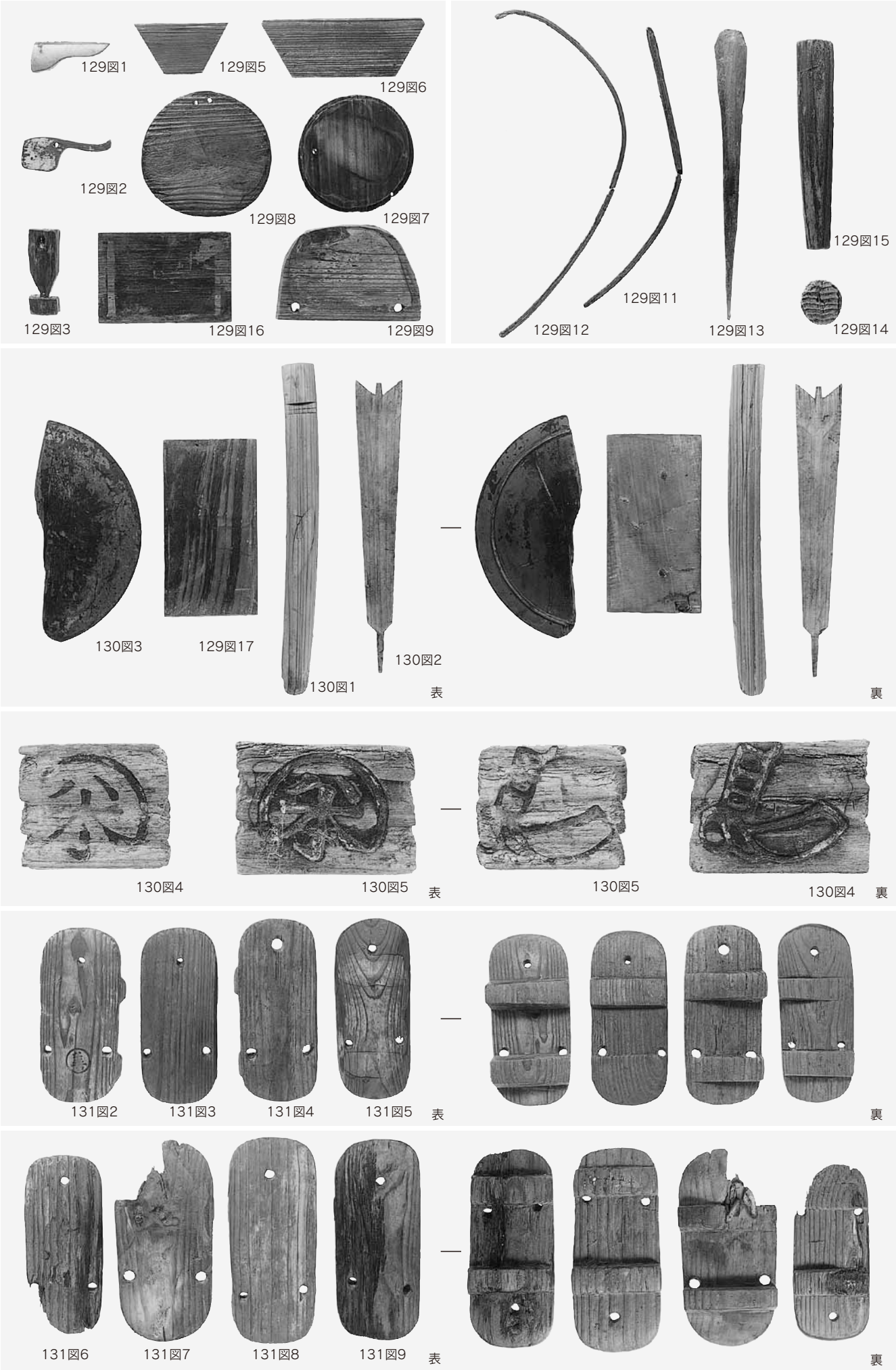




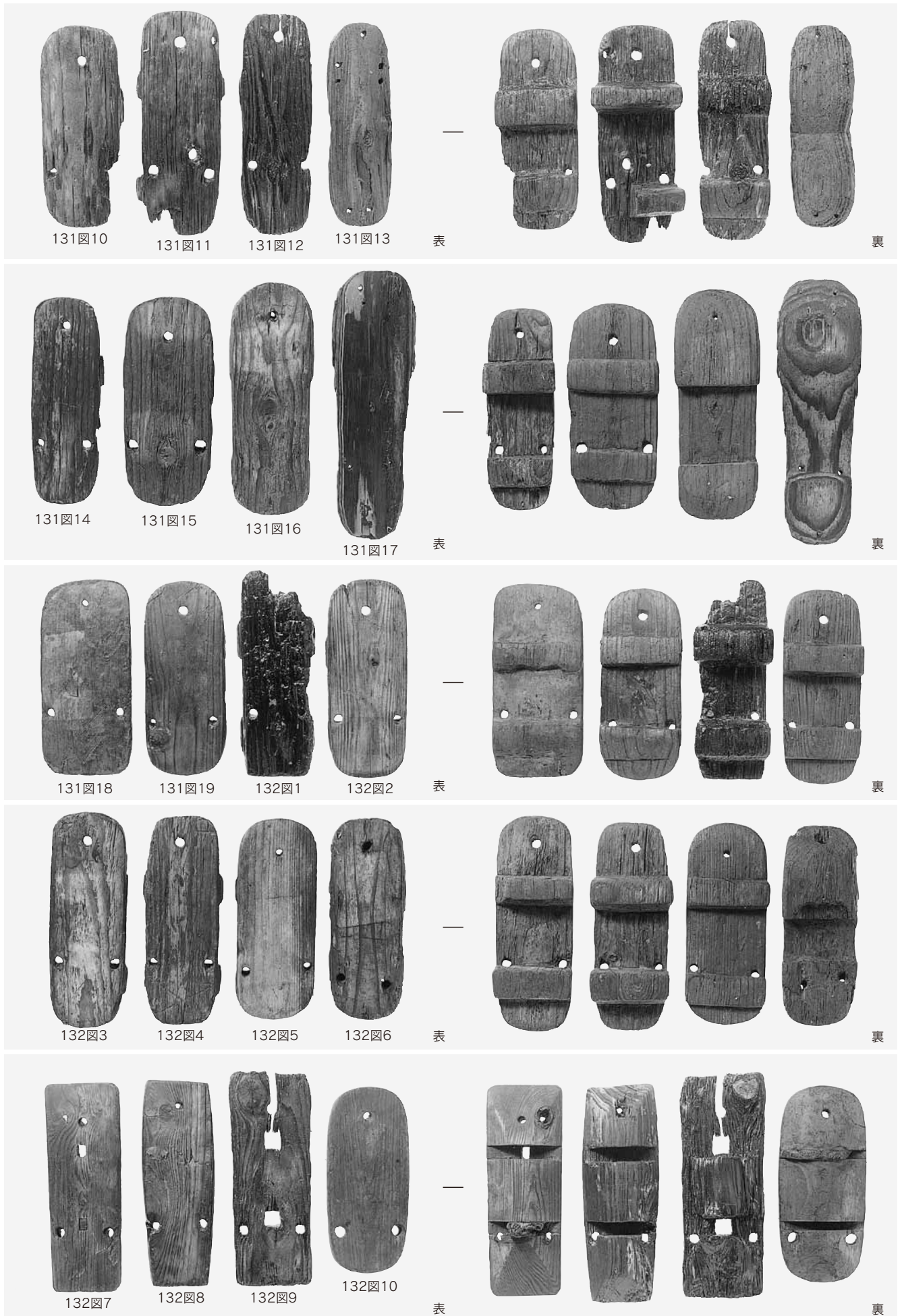


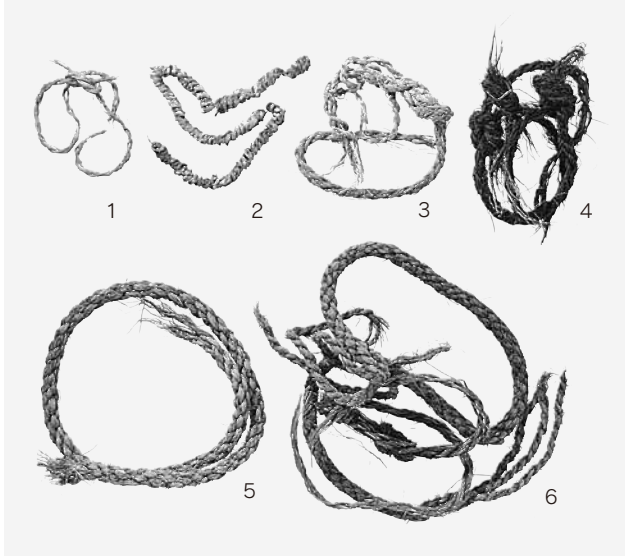


1次調査出土ガラス・木製品



1次調査出土木製品 1





1 次調査出土木製品 3